KJFC(九谷ジャズファンクラブ)会報 http://www.ne.jp/asahi/jazz/kjfc2000

World's FINEST Jazz Club KJFC

GROOVY

VOL. 36

2005. 6. 25

シリーズ特集:"今"のジャズ喫茶

CONTENTS

GROOVY VOL.36 **2005.3.26**

Japan Jazz Junction

シリーズ特集(１)　『“今”のジャズ喫茶」　『映画館』 ―― 3

「日本ジャズ喫茶物語」　高木　信哉 ―― 6

懐かしのジャズ喫茶　Ｍ．Ｓ． ―― 8

DISK

紅　我蘭堂 ―― 9

ハービー・ハンコック研究・第３回　高木　信哉 ―― 11

気まぐれジャズマン　第１８回　水戸守敬一郎 ―― 16

カドやんのジャズ教室　vol．２２　門倉洸太郎 ―― 17

TAKE　THE “Ｃ” TRAIN　Ｍ．Ｔ ―― 18

A LETTER FROM THE BASSMAN　伊藤　潮 ―― 19

会員紹介　第１回　渋谷秀夫氏 ―― 20

ライブコンサートのご案内　Ｍ．Ｓ ―― 22

レッド・ガーランドの魅力について　第２０回　紅　我蘭堂 ―― 23

RECORD CONCERT REPORT

石井宏一 ―― 25

Ｙ．Ｓ． ―― 29

石井宏一＆紅　我蘭堂 ―― 32

表紙および本文中イラスト制作・・・・・水戸守敬一郎
(各ロゴマーク及び17ページのイラストを除く)

このＰＤＦ版GROOVY-36は、印刷物として発行したものを基に新たにレイアウトしています。
したがって、一部印刷物とは異なる部分があります。

Japan Jazz Junction

GROOVY　シリーズ特集（1）『“今”のジャズ喫茶」

　60年代・70年代のジャズ喫茶は、新譜紹介を中心として素晴らしいオーディオ装置でレコードを楽しむということや、ひとつのカルチャーとしてジャズを共有する“場”としての存在意義があったように思う。
　近年趣味の多様化、オーディオ・レコード(CD)の入手しやすさ等の理由で、ジャズ喫茶の存在が危ぶまれている。絶滅危惧種というわけではないが、ジャズ喫茶がなくなることは淋しい。ジャズは生きていくためには必要ではないが、ジャズを楽しむゆとりを失えば、生きていく資格を失うことにもなりかねない。私たち人間は環境を破壊してきたと同時に、心のゆとりも失いつつあるのだろう。
　その反面ジャズというミュージックが電波媒体などの各種媒体や店舗のBGMなどに使われて、街中に露出し"特定の人間が聞く、特殊な音楽"という偏見なり差別が希薄になってきたようにも見うけられる。若い人を中心に改めてじっくりとジャズを聴いてみたいという人もわずかなりに増えているように見える。ただし、まだ店には入るのが怖いという人もいるようだ。
　ＫＪＦ会報ＧＲＯＯＶＹでは、数回にわたって“今”のジャズ喫茶を取材して、そのＰＲとともに魅力をレポートしてみたい。
　第１回目はＫＪＦが例会などで非常にお世話になっている東京文京区の白山にあるジャズスポット「映画館」の吉田昌弘マスターにご登場いただいた。

スピーカーを舞台にしたライブ演奏が理想

本誌「マスターこんにちは。よろしくお願いいたします。さて、まずこのお店の最大のセールスポイントをお聞かせください」
吉田「うちは何と言ってもオーディオです。いかに良い音で聴いてもらうかを日々努力しています。どういう音がいい音かという考え方だけども、例えばスピーカーに近づいたところで聴くと、ヘッドホン的に、そのユニットの音がもろに出ますよね。いい悪いに関係なく、それなりに楽器の音が強調されるけど、少し離れて聴くと部屋の残響が大きくなりますね。スピーカーから離れれば離れるほど、カーテンが掛かったような、音にベールが掛かった状態というか、だんだんリアルな音からかけ離れていきますよね。それをどうやったら、よりリアルな音に近づけるかが第１ステップです。

次の段階としては、私はレコードを掛けるということは、単にスピーカーから音を出すということではなくてね、スピーカーを仮想の舞台にしてプレイヤーが演奏しているという臨場感が出るかどうかと考えています。音がリアルということと臨場感があるということは決して同じではないんです。音はクリアーでリアルなだけではなく、あくまでもそこで演奏しているように“響いている”かということなんです。そうなると単に装置だけではなくて、部屋をどういじるかということも大切になってきます。部屋の吸音と反射をどのようにミックスしていくかが問題なのです。

　同じ反射でもトンネルとか銭湯・お風呂での残響、いわゆるエコーというのがありますね。部屋の中でう

まく残響を利用しようとすると、やっぱり石膏ボードやラワンベニヤ板などは材質として適さないのです。楽器でもギターの材料にベニヤ板を使っているなんて聞いたことないでしょ？　やはり天然の無垢な木はいい音で響きます。うちでは店内の随所に天然木を使って、残響をうまく利用しようと考えています。またその方が、アコースティックな音が出るのです。

老舗ではなく、まだまだ駆け出し。レコードはリクエストを待っている。

本誌「聞いたところによりますと、もう開店されてから３０年近くの歳月が経ったとか。ジャズ喫茶のでは老舗といえますね」
吉田「いえいえ、一度も老舗だなんて思ったことはありません。むしろ今でもこの業界では駆け出しだという意識が強いです。実際にまだまだ知らないことも多いしね」

本誌「お店がオープンしたのは、何年頃なのですか」
吉田「う～ん、よく覚えてないのですが、多分１９７０年代の終わり頃、昭和５２年だったと思います」
本誌「当時と今では、ジャズそのものも変わってきましたが、ジャズ喫茶の存在意義も変わってきているでしょうか」
吉田「もちろんです。当時は誰もが豊かでなくて、ＬＰレコードが高くて買えない人が大勢いました。だからジャズ喫茶にある１枚のアルバムを、お店に出入りする100人や1000人が聴くという共有感がありました。そうなると単なる音楽を聴くということではなく、文化を広めているという使命感もありました。やがて時代が変わって例えば映画もそうですが、今ではスケールダウンはするけどビデオもあればＤＶＤもあって、なかなか映画館で見る人も減ってきたのではないでしょうか。またジャズを取り巻く環境も大きく変わってきて、今では焼肉屋のＢＧＭにもジャズが使われるなど、市民権を得たと思います。

まだまだ店には聴いていただきたいレコードがたくさんあるので、店に来て自分がＣＤで持っていないアルバムをたくさんリクエストしてもらいたいです」
本誌「文化といえば、このお店ではジャズ以外にも様々な活動が行なわれているようですが、ご紹介していただけませんか」
吉田「はい、開店当初は店の名前の通りに本当の映画の上映会を行っていました。6，7年前から若い人たちの詩の朗読会が始まって、回を重ねるごとに盛況になってきましてね。大きな声では言えないのですが、この店に最高55人まで入ったこともありました。その時は真剣に酸欠者が出るんじゃないかと心配しました（笑）。今ではそのうちの何人かが詩人として活動したり、プロデューサーになったりして、育ってくれています。先日も女性の方が明大前で男性３名による詩の掛け合いを行なうライブをプロデュースしたのですが、満員盛況

パーカーからフリー・ジャズ、日本人プレイヤーまで掛けます。リクエストが多いのは、やはりジョン・コルトレーンとかエリック・ドルフィーが多いですし、バド・パウエルやセロニアス・モンクなども意外にリクエストが多いですよ」
本誌「そのリクエストって、半分強制したものも含まれていませんか（笑）」
吉田「(笑）そんなことはありませんが、やっぱりね、普通の人が持っていないような珍しいレコードは、どんどん聴いてもらいたいですね(笑)」

でした。
　また昨年から日本人のジャズを聴いてもらいたくてライブに本腰を入れています。昨年１１月に行なった中山英二さんや、今年の５月に行なったハーモニカの松本敏明さんのライブは大変好評でした。これからも年２,３回のペースでライブをやります」
本誌「２回のライブは本当に楽しかったし、素晴らしかったですね。ところでこの膨大なレコードは何枚くらいあるのですか」
吉田「う〜ん、困ったな。数え切れないのです。今度暇があったらいっしょに数えてみませんか（笑)」
本誌「いえ、ご遠慮しておきます（笑)。それでも１枚１枚覚えておられると思いますが、このお店のイチオシのアルバムはどれでしょうか」
吉田「それは難しいですね。好きなレコードは何枚もあります。でもイチオシのレコードはその日の気分で変わりますから。それは私だけでなくて、皆さんも同じでしょう」
本誌「はい、確かにそうですね。ところで、よく掛かるレコードはどのような傾向のレコードですか」
吉田「これは幅広いですよ。それこそチャーリー・

今後のジャズについて

本誌「最後に少し難しい質問ですが、一般的にジャズは５０年代・６０年代で終わった、いや死んでしまったと言われているようですが、それについてはどう思われますか。またこれからのジャズはどういう方向へ向かうのでしょうか」
吉田「確かに難しい質問ですね。でもジャズが５０年代・６０年代で死んだかは人それぞれの感じ方があるので、一概には言えませんが、それはないと思いますよ。これからはいろいろな音楽とクロスオーバーしながら進化していくのではないでしょうか。７０年代のフュージョンとも違うけれどね。最近の日本人プレイヤーは本当にうまくなったでしょ。今でもヨーロッパのジャズを聴くとすぐヨーロッパだと分かるようにね、日本ではアメリカの真似でなくて独創的な音楽を作る可能性がありますね。今は自分の音楽としてジャズを消化していて、合わせて進化している段階だと思います」
本誌「本日は、お忙しいところ本当にありがとうございました。

〔取材後記〕
最近の吉田マスターは人の顔を見ると「どう、音が良くなったでしょ」と聞きまくっている。本当に毎日毎日試行錯誤されている様子が分かる。現状に満足しないことが、このお店が独特なクリエイティブ空間として存在している要因なのだろう。事実その雰囲気に吸い寄せられるようにジャズで言えば大和　明さんや岡村　融さんたちの超ベテラン・ジャズファンや、都内でも有数のレコード・コレクター・グループが毎週末には集結するし、詩を介在して多くの若者も去来する。ただし多士済々が集まるとはいっても、いわゆる常連たちが巾を利かせている梁山泊みたいな、入店しづらいムードもない。そこにはマスターの温和な瞳と最高のオーディオと膨大なレコードが待ち構えているだけ。どうか一度はご来店を。

「日本ジャズ喫茶物語」

高木信哉

1970年春、マイルス・デイビスの新作『ビッチェズ・ブリュー』が発売され、世界中のジャズ・シーンは震撼した。「マイルスはジャズの魂をロックに売り渡した裏切り者」と、非難囂々だった。マイルスは誹謗中傷など意に返さず、次の作品『ジャック・ジョンソン』を録音中であった。時代は大きく変わろうとしていた。前年の69年、ニューヨーク郊外でウッドストック・ロックフェスティバルがあり、40万人もの人々が集まり、アポロ11号が月面着陸し、人類が初めて月に降り立った。日本はＧＮＰで世界第２位になった。マイルス・デイビスの『ジャック・ジョンソン』は、従来のジャズ・ファンには敬遠されたが、ロックしか聴いたことない若者たちからは「格好いい」と歓迎された。

ジャック・ジョンソンは、1908年に黒人初の世界ヘビー級チャンピオンになった男だ。白人女性と結婚して、さまざまなトラブルに巻き込まれていくが、パーティ好きで騒いで踊るのが大好きだった。ジャックは1920年代の初め、ニューヨークのハーレムに、500席のキャパを誇る高級クラブ「クラブ・デラックス」のオーナーになっていて羽振りがよかった。20年から33年までは禁酒法が施行され、法律の目を盗んで各地に「スピーク・イージー」と呼ばれるモグリ酒場がオープンした。多くはマフィアが経営し、彼らが好んだジャズ演奏が売り物になっていた。夜毎客がつめかけるジャックの店は、44回も逮捕されたマフィア「殺し屋オウニー」ことオウニー・メイデンに強引に乗っ取られてしまう。オウニーは客席を700席に増やし、店の名を「コットン・クラブ」と替え、1923年にオープンした。つまり、ジャック・ジョンソンはあの「コットン・クラブ」の前のオーナーだったのだ。ここには常時、30人以上のダンス・ガール、タップダンスのニコラス兄弟そしてデューク・エリントン楽団がいた。特にエリントン楽団の演奏は、ジャングル・ムードと呼ばれ、評判に評判を呼んだ。「コットン・クラブ」の豪華絢爛な雰囲気は、リチャード・ギア主演で話題となった映画『コットン・クラブ』によって再現された。映画を見ると改めて当時は、こんなに華やかだったのかと驚くばかりである。

それから10年後の1933年(昭和８年)に、日本で初めてのジャズ喫茶「ちぐさ」が、横浜にひっそりと開店した。店主は、有名な吉田衛である。「ちぐさ」は、ダンスホールに行けない若者やステレオやレコードを買う余裕のない人達、多くのジャズメンたちにジャズの醍醐味を教え、ジャズを大衆に広めてきた。桜木町駅前の小路を抜けていった右手、野毛山の川っぷちに「ちぐさ」はあり、今日までずっとジャズを守り通してきている。まだ行ったことがない方には、一度訪ねてみて欲しい！意外に小さな店内に驚くが、歴史ある独特の趣きに感動を覚えるはずだ。
横浜ちぐさ

東京のジャズ喫茶の草分けは、上野・池之端仲町通りにあった「イトウ」である。

1934年（昭和９年）に、伊藤栄治郎が、開店した。ここにはブルーノートやプレスティッジの初期のレコードが豊富にあった。美味しい珈琲を飲みながら、みんなジャズの勉強をしたものだ。商売度外視という感じで、ジャズの砦をずっと守り続けていたが、時代は流れ、レコードもＣＤに変わり、1991年10月末日を持って、その長い歴史にピリオドを打った。私は、高校～大学～社会人の間、ずっと「イトウ」に通うのが、とても楽しみだった。何時間居ても飽きなかった。何となく常連客には、定番の位置の席があった。レコードは高かったので、「イトウ」で色んなアルバムを聴き、その中から本当に気に入ったＬＰを買った。息子さん（伊藤順一）とお母さん（伊藤百合子）の二人がやっていた。今も上野の街を歩いていると、「イトウ」をよく思い出す。今は、仲町通りもすっかり変わり、すっかり下品な雰囲気になってしまったのを、大変悲しく思う。

さて日本のジャズメンたちの溜まり場になっていたのが、有楽町駅前のすし屋横丁前にあったジャズ喫茶「コンボ」だった。「コンボ」は、「ショーティ」こと

川桐徹が、1952年（昭和27年）４月に開いた店だ。川桐は、戦後米軍に接収されていた帝国ホテルに５年ほど勤め、ホテルが日本に返還される時に希望退職した。自分でもウクレレを弾き、ディキシーやハワイアンも好きだった川桐は、多少の貯金もあったので、ジャズ喫茶を始めた。黒人や白人の米兵が来るようになり、やがて場所がいいので、ミュージシャンの溜まり場、待ち合わせ場所になっていった。ＬＰは、兵士にお金を渡せば、闇ルートで新着モノが手に入れられた。左隣が、ワイシャツ屋で、「コンボ」の大きな音で、陳列のワイシャツがよく落ちた。アンプも毎日、17～18時間もつけ放しだったので、よく煙が出た。当時は、真空管アンプだったのだ。この店に、秋吉敏子、渡辺貞夫、宮沢昭、守安祥太郎、高柳昌行、松本英彦、三保敬太郎、岡田真澄、湯川れい子、植草甚一、大橋巨泉、いソノてルヲ、内田修らが顔を出していた。もっとも10人も入れば、いっぱいになってしまう狭い店だったので、いつも満員で、誰かが入ってくれば誰かが出なければならなかった。
当時は輸入盤が貴重で、一枚3500円もした。これは大卒の初任給の半分もしたため、みんなジャズ喫茶に通っていた。守安と秋吉は、バト・パウエルの「ウン・ポコ・ロコ」を採譜するため、すり切れるほどレコードを聴いた。実際、すり切てしまい、オーナーの川桐徹は、あと３枚も買い換えたことをよく覚えている。それではバド・パウエルのコピーを実際に試してみようと、アフター・アワーズのジャム・セッションがよく行われた。中でも伝説となったのが、54 年 7 月27日の『幻のモカンボ・セッション』である。その日、長く続いた梅雨が明け、その年、初めて気温が30℃を超え、横浜の街は夏の到来を実感した。実は、ジャズ喫茶「コンボ」に集う人たちの手によって、守安祥太郎が参加した『幻のモカンボ・セッション』が残された（録音された）のである。

あまり知られていないが、名古屋にもかつて「コンボ」というジャズ喫茶があった。久野史郎が、1954年（昭和29年）、栄の「乃んき横丁」に、名古屋で初めてのジャズ喫茶「コンボ」をオープンした。この年、名古屋テレビ搭が完成した。名古屋のジャズの本格的な発展は、ここから始まった。「乃んき横丁」は、戦後間もない1947年（昭和22）に出来た。南北に走る七間町通とT字形に交わり、西に20メートルで行止りになる。両側に小さな店舗が10軒ずつあった。間口がまるで羊羹を切ったように、寿司屋、おでん屋、居酒屋、バー、お好み焼き屋などの店が並んでいた。入口には、「乃んき横丁」の看板がかかり、まっすぐ入って右側の3軒目が「コンボ」だった。店内は、暗く、黒人たちの客が多く、白い歯が闇の中に見える。大音響で、モダン・ジャズがガンガン鳴っている。およそ8坪くらいの細長いレイアウト、右側突き当たりに3人掛けのカウンターがあり、そこだけ少し明るい。4人掛けのテーブルが６つあったので、合計椅子席は27人分あった。すぐいっぱいになってしまうので、しょうがないからカウンターの所に固まって立っている客がたくさんいた。初めて入ると、暗闇の大音響の中、白い歯の黒人たちがリズムに合わせて、首を振り、何やらブツブツ口ずさんだりしていて、黒人特有の甘酸っぱい体臭と共に、ここは一体どこと場違いの所に来てしまったような雰囲気に圧倒された。マスターの久野史郎は、名古屋弁と英語を巧みにおりまぜながら話すおもしろい魅力的な人物だった。時は流れ、乃んき横丁も地上げ、バブル崩壊の流れを受けて、なくなることになり、１９９７年１１月、「コンボ」は、４４年間の活動に幕を下ろし、店を閉じた。乃んき横丁のあった場所を訪ねてみたが、今は、駐車場になっていた。

新宿は、かつて日本のジャズの聖地であった。１９６５年クリスマスイブにオープンした「ピットイン」は、山下洋輔らジャズメンの溜まり場になっていたが、６６年からライブを開始する。帰国したばかりの渡辺貞夫が、菊地雅章、鈴木勲、富樫雅彦らバリバリの若手を強引にリードして吹きまくるアドリブの響きにファンはうなった。そのチャージは５００円であった。コマ劇場が出来たのは６６年だが、近くに「タロー」というライブハウスがあった。この「タロー」の店主の奥さんが、実は、現在の南青山にある「ボディ・アンド・ソウル」の京子ママなのである。
新宿アルタの裏手にあるレストラン「アカシア」の３階には、「ＤＩＧ」があり、植草甚一がよくコーヒーを飲んでいた。「ＤＩＧ」は、日大・芸術学部写真学科を卒業したばかりの中平穂積が、1961年11月にオープンしたジャズ喫茶である。中平は、新宿のジャズ喫茶「ポニー」、「木馬」、有楽町の「ママ」の常連客だった。ちなみに今も昔も安くて美味しい「アカシア」の不動のメニュー「ロールキャベツ」はライスがついて当時は５０円、現在は６９０円である。「ＤＩＧ」は、その後の全国のジャズ喫茶ブームのお手本になった店である。当初、コーヒーは１杯６０円だった。周りの新宿の普通の喫茶店は、１杯４０円だった。店内には、古時計が掛かり、間もなくして「木馬」でも掛かるようになり、そのうち全国に広まって、いつの間にか古時計がジャズ喫茶の象徴となって

J.J.J.

いった。トミー・フラナガンの「オーバー・シーズ」の輸入盤を中平は、５万円で購入した。

1960年代後半になると東京のジャズ喫茶の親睦組合「ＭＪＬ」（モダン・ジャズ・リーグ）が出来て、スイングジャーナルに広告を出すようになった。1967年１１月、中平穂積は、新宿・紀伊国屋裏にお酒も飲めるジャズ・バー「ＤＵＧ」をオープンする。現在のカフェ・バーの走りのような店で、それはそれはモダンで素敵な店だった。1977年2月、中平は、新宿・靖国通りに「ｎｅｗ　ＤＵＧ」をオープンする。地下１階から３階まである豪華なビルは、ジャズ・ファンの度肝を抜いた。思えばいい時代だった。

1983年（昭和58年）1月、ジャズ喫茶「ＤＩＧ」は閉店し、「ジャズ喫茶衰退か」と新聞記事が載った。さて当時、ジャズ喫茶は全国に何軒ぐらいあったのであろうか？

横浜のジャズ喫茶「ちぐさ」の店主、吉田衛によると、「ジャズ喫茶は、1985年当時、500軒以上あった」そうだ。現在は、一体何軒あるのだろうか？

1981年9月28日、ニューヨークにジャズ・クラブ「ブルーノート」がオープンし、大きな話題となった。１９８６年８月末には、山中湖湖畔で、伝説の「第１回マウント・フジ・ジャズ・フェス・ウイズ・ブルーノート」が開催された。多くの大物ジャズメンと共に、ブルーノートの創設者アルフレッド・ライオンが初めて日本の地を踏み、日本のジャズ・ファンは熱狂した。1988年11月28日、「ブルーノート・ニューヨーク」のフライチャイズとして、南青山にジャズ・クラブ「ブルーノート東京」がオープンする。翌年いきなりハービー・ハンコック、ディジー・ガレスピー、サラ・ボーンの出演を実現させ、名声を確立した。この「ブルーノート東京」の出現が、日本のジャズ・シーンを一変させていく。

最近よく「ライブハウス不況」という言葉を耳にするが、そうではない。30年前の東京には「ピットイン」「タロー」「ジャンク」「ナル」の４軒ぐらいしかジャズのライブハウスはなかったのだ。それが今は、100軒以上もあるのだ。これは、世界一の数である。ジャズの場が分散され、東京の街に広くなじんでいる。「ブルーノート東京」の客席は300席もあり、ニューヨークの本店より今は立派だ。ニューヨークのタワーレコードより渋谷のタワーレコードのほうが圧倒的にジャズの在庫が豊富だ。

1985年に小川隆夫氏は、『マンハッタン・ジャズ・カタログ』（ジャズ批評５８号）というニューヨーク・ジャズのガイドブックを上梓した。その中で、マンハッタンのライブハウスが85軒紹介されているが、現在も営業を続けているのは30%にも満たない。

ニューヨークに限らず、世界のジャズ・ライブ・ハウスの移り変わりは、激しい。

現在のジャズ喫茶の数は、残念ながら調べきれないが、今から２０年前の1985年当時、500軒以上あった。ジャズ喫茶探索のバイブルであったジャズ批評別冊の『ジャズ日本列島』も、1995年版を最後に発行されてない。『ジャズ日本列島』によると、ライブハウスを含んだ数だが、全国のジャズのお店は、約700軒ある。ライブハウスをさっぴくとざっと 500軒ぐらいだろうか？特にジャズ喫茶は、地方に根強く生き延びている。

人も街も時代と共に移りゆく。誰も時間を止めることはできない。　　―了―

懐かしのジャズ喫茶

M.S.

全てもう営業していない店だと思います。木馬はあるのでしょうか？　木馬、ＳＴＩＣＫ、バードランド、ＰＯＮＹは新宿。ＪＵＮＫは銀座。ＣＲＥＳＣＥＮＴ、ＧＲＥＥＮ　ＤＯＬＰＨＩＮは中野。ハーフノートは向ヶ丘遊園。５ＳＰＯＴ（イソノテルオ氏の店）は自由が丘。シェルブールは下北沢にありました。

ＤＩＳＫ　　紅　我蘭堂

ＳＯ　ＭＡＮＹ　ＳＴＡＲＳ/斉藤真理子

(What's New Records WNCJ-2142)

斉藤真理子(ｐ)、俵山昌之(ｂ)１・３・６・９、佐々木悌二(ｂ)２・４・５・７・８、広瀬潤次(ds)　2004年9月22日、26日録音

1.If　I Were　A　Bell 2.Flower　In The　Heaven 3.The　Sidewinder 4.Love &Peach　5.So Many Stars　6.Three　Legs 7.Identity　8.When　You　Wish Upon A　Stars　9.Goodbye

このアルバムを聴いた印象は“進化と挑戦”ということです。斉藤真理子さんのピアノによる創造性はファースト・アルバムから進化しています。また挑戦ということは、「ほう、こんな“手”があったか」と唸ってしまった１や３の演奏で表されています。斉藤真理子さんの言葉では、このアルバムはライブ感覚で創ったとのこと。そう言われて聴き返せば、なるほど確かに一発勝負であるライブ演奏に通じるスリリングな表現もしくは技法が随所に感じられます。私は、ライブ演奏とアルバム・レコーディングでは音創りを変えるプレイヤーが多いと感じていますが、彼女が大げさに言えばジャズの新しい局面を開拓しようと挑戦している気概を、ひしひしと感じます。ライナーノーツを書かれた高木信哉さんも「力まかせでない力強さ」と表現していましたが、彼女を含めたメンバー全員による情熱的で感情がこめられた、これほど“熱いアルバム”は久しぶりです。情熱的というのは、何も急速調の曲だけではありません。例えばタイトル曲「ソー・メニー・スターズ」に耳をすませば、深いエモーショナルな表現力も、納得いただけるでしょう。ぜひお聴きください。

。たいいってったて、最後にファンとして勝手なことを言わせていただきますと、真理子さんにはこのまま進化し続けてもらいたいのですが、ぜひとも我々ファンが“YEAH！　YEAH！”を連発するような《必殺！　決めフレーズ》を持っていただきたい。パウエルやモンク、シルバーやガーランドにしても誰が聴いてもそのプレイヤーが分かる《決めフレーズ》を持っています。歌舞伎でいう（大向こう）を唸らせるパターンをぜひ創ってください。そうすれば《真理子ワールド》は完成でしょう。

存在～New & Old Wonder/音川英二WITH森山威男

(発売：ハートミュージック　製造、販売EAST　WORKS　ENTERTIMENT KTST-7002)

音川英二(Sax)，森山威男(ds)，田中信正(p)，高瀬　浩(b)，佐藤芳明(Accordion)，森山由紀子(Percussion)※Only　５　2003年3月24，25 日録音

1.New & Old Wonder Trilogy PartI B/E PartII　G On DPartIII New & Old Wonder　2.Wild　River 3.Life As Is 4.Primal Force 5.Giants Steps 6. 日本海の朝焼け

コルトレーンはお嫌いですか？　たまにはコルトレーンなどいかがでしょうか？　冒頭から訳の分からない質問で申し訳ありませんが、３パートに分かれているタイトル曲をとにかくお聴きください。後期とくに死の直前におけるコルトレーンの激しい演奏に嫌悪感を持つ方も納得いただけるくらい、テンションの高さと深みのある表現をお聴きいただけるでしょう。日本におけるコルトレーン派の双璧(もうひとりは井上淑彦)と私が勝手に思っている音川英二の“音楽表現”にかける意気込みは、感動的です。タイトル通りに“今、現在の自分という存在”を表現しつくしています。またドラムスの第１人者である森山威男の、時に音川を鼓舞し、時に真っ向から挑みかかるようなドラムスも聴きどころです。両者のスリリングな掛け合いはジャズが持つ“心地良い緊張感”を創造しています。激しい曲でも静かな曲でも、創造にかける真剣勝負の気迫をひしひしと感じます。このふたりに挟まれているようですがKJFCゆかりの田中信正のピアノもいいです。またジャズには珍しいといえるアコーディオンも、隠し味のように効いています。ほのぼのとした哀愁ただようこの音色があるから、テナーやドラムスも一段と映えるのでしょう。

　最後にこれまたファンの勝手なお願いですが、音川英二はどんどんアルバムを発表して欲しい。それもできればこのユニットというかメンバーでできればお願いしたい。

J.J.J.

ＦＯＲ　ＬＯＶＥＲＳ／土濃塚隆一郎

(OMAGATOKI　OMCZ－1017)

土濃塚隆一郎(flh)、板垣光弘(p、kyd, org)、吉木　稔(b, elb)、宇山満隆(ds, per)、外園ゆういち(ds、per)　2004年8月3,4, 5日録音

1.Beautiful Love 2.Grangpa 3.Scandal 4.Estate 5.Del Sasser 6.Change The World 7.Until Tomorrow 8.Solar 9.Lonely Soul 10.Without A Song 11.Autumn Leaves 12.Feel Like Makin' Love

“若い”というだけで、何をやっても許されることもあります。だがこのアルバムにおける土濃塚たちの演奏は、ストリート・ライブの経験を積み重ねてきているだけに、若さにまかせた暴走ではなく、きちんと聴かせどころをわきまえていて、立派なミュージックとなっています。それにしても音色が柔らかいフリューゲルホーンを駆使して吹き上げる、こんなに激しいビューティフル・ラブやオータムリーブスは滅多にないでしょう。でもそれは私が持っていた、これらの曲に対する既成概念を吹き飛ばしてくれて、爽快感がありました。多くの人の批判を覚悟で、あえて暴走気味に演奏してくれた彼らに、乾杯です。

**　でもね、これまたファンの勝手な言いぐさですが、この若者たちは本当にうまい、うますぎる。何年か前に大塚にあるライブハウス「ドンファン」で聴かせてもらった吉木君は本当に成長したと感じました。だから、うますぎるから今度はミストーンやミスタッチの連発でもいいから、そんなにライブを聴きに行ける時間の余裕がない私のようなものにとって、もっと熱く情熱的なライブ盤をぜひとも聴かせてほしいものです。**

Hard Bop Cafe
IRYS

渋谷区桜丘町 17−10　吉野ビル3F

営業時間：月・火　18:00 ～ 24:00　水～土　13:00 ～ 24:00　日　13:00～18:00

営業日・営業時間は電話もしくはホームページでご確認ください。

電話03−5456−2545　e-mail:cafeirys@cf6.so-net.ne.jp

URL　http://www012.upp.so-net.ne.jp/cafeirys/

ハービー・ハンコック研究・第３回

(“ Retrospective of The Music of Herbie Hancock ”)

高木信哉

（1963：マイルス・デイビスとの出会い）

ＨＥＲＢＩＥ １９６３

録音日　/タイトル　/演奏者　(レーベル名)

1963. 1.12 A New Perspective / Donald Byrd (Blue Note)
1963. 2.11 Vertigo / Jackie Mclean (Blue Note)
1963. 3. 7 No Room For Squares / Hank Mobley (Blue Note)
1963. 3. 7 The Turnaround / Hank Mobley (Blue Note)
1963. 3. 7 Straight No Filter / Hank Mobley (Blue Note)
1963. 3.10 The Illinois Concert / Eric Dolphy (Blue Note)
1963. 3.11 Swamp Seed / Jimmy Heath (Riverside)
1963. 3.19 My Point Of View / Herbie Hancock (Blue Note)
1963. 4. 1 Una Mas / Kenny Dorham (Blue Note)
1963. 5.14 Seven Steps To Heaven / Miles Davis (Columbia)
1963. 5.20 Donald Byrd ﾘｰﾀﾞｰ作録音のみ(未発表)(Blue Note)
→未発表だったが、1997年になって、Donald Byrd の『Blackjack』(67年録音作品)に、1曲(「All Numbers」)だけﾎﾞｰﾅｽ･ﾄﾗｯｸで追加された。
1963. 6月　Miles In St.Louis / Miles Davis (VGM)
1963. 7.27 Miles In Europe / Miles Davis (Colunmbia)
1963. 8.13 Step Lightly / Blue Mitchell (Blue Note)
1963. 8.30 Inventions & Dimensions/ Herbie Hancock (Blue Note)
1963. 10.9~10.10 Miles Davis with Gil Evans and his Orchestra 録音のみ (未発表) (Colunmbia)
→未発表だったが、「The Time Of The Barracudas」)が、『Quiet Nights』のﾎﾞｰﾅｽ･ﾄﾗｯｸとして陽の目を見て、その後発売された6枚組のﾎﾞｯｸｽ･ｾｯﾄ 『Miles Davis/Gil Evans The Complete Columbia Studio Recordings』にも収録された。

1963年のハービー・ハンコック（22歳~23歳）は、ドナルド・バード・クインテットを脱退して、栄光のマイスル・デイビス・クインテットに加入した。ハービーが新しい一歩を踏み出した記念すべき年だ。また自身のリーダー作を二枚（『マイ・ポイント・オブ・ビュー』、『インベンションズ&ディメンションズ』）も録音した。

1963年は、自由と民主主義の象徴だったケネディ大統領が暗殺され、人種差別反対のワシントン大行進に２０万人が参加した激動の年だ。ショウ・ビジネスの世界では、映画『ウエスト・サイド物語』がロードショウ連続７５週の新記録を樹立した。

ジャズ界では、前年に気に入っていたマウス・ピースを壊したジョン・コルトレーンがしばらく激しい演奏が出来ず、そのため仕方なく吹き込んだ『バラード』、『デューク・エリントン&ジョン・コルトレーン』が結果的に歴史に残る名盤となったのは皮肉な事実だ。また渡仏したデクスター・ゴードンが、先にパリに渡っていたバド・パウエルの参加を得て『アワ・マン・イン・パリ』を早速録音した。5月には、セロニアス・モンクが初来日し、１２月にはリー・モーガンが『ザ・サイド・ワインダー』を録音した。そしてマイルス・デイビスがハービー、ロン・カーター、トニー・ウイリアムスの参加を得て、ニュー・クインテットを結成した。これによりジャズ界に新時代が到来する！

63年1月12日、ハービーは、バンマスのドナルド・バードの新作『ア・ニュー・パースペクティブ』の録音に参加した。『ア・ニュー・パースペクティブ』は、ドナルド・バード自身のフェイバリット・アルバムで、男女各４人の“聖歌隊”をバックにしたゴスペルをソフィスケーションしたユニークなアルバムである。86年、「ワン・ナイト・ウイズ・ブルーノート」直後に、英ＢＢＣが制作したブルーノート特別番組で、リード・マイルス（ブルーノートのジャケット・デザイナー）が自選No.1にあげていた。優れたアレンジは、ハービーの前任ピアニスト、デューク・ピアソンが行った。ルーサー・キングの葬儀にも使用された作品である。ハービーは、「ビースト・オブ・バーデン」、「クレスト・レジンダー」で哀愁に溢れた珠玉のソロを取っている。

2月11日、ハービーは、ジャッキー・マクリーンの『バァーティゴ』の録音に参加する。バンマスのドナルド・バードとバンド・メイトのブッチ・ウォーレン(b)も一緒に参加した。このアルバムの重要な点は、天才トニー・ウイリアムス（当時まだ１７歳）の初レコーディング作品ということだ。従ってトニーとハービーの初共演作ということでもある。ハービーは、とにかくトニーのドラムに驚愕した。このアルバムには、ハービーのオリジナル「ヤムズ」も収録されている。

3月７日、ハービーはバンマスのドナルド・バードとバンド・メイトのブッチ・ウォーレン（b）の３人で、ハンク・モブレーの録音に参加した。全６曲の録音を行ったが、それらは、やっかいなことに『ノー・ルーム・フォー・スクエアズ』、『ザ・ターン・アラウンド』、『ストレイト・ノー・フィルター』という３枚のＬＰに分散収録されてしまった。

3日後の3月10日（日）、ハービーはイリノイ大学で、エリック・ドルフィーのコンサートに参加していた。中東部の名門イリノイ大学は、大都市シカゴでは小さな町シャンペーンにある。シャンペーンはシャンパンに似ているが、お酒ではなく「平原」を意味している。イリノイ大学は、１８６７年に創立され、緑に囲まれた広大なキャンパスで、赤レンガを基調とする建物が中々モダンである。このライブは、99年に突如リリースされた。ドルフィとハービーの共演盤ということで大変貴重である。１曲目の「朝日のようにさわやかに」は、20分を超える演奏だ。コード・チェンジの束縛を逃れたドルフィは、曲に力強さを与え、そこへぴったりついていくハービー。このコンサートの２ヵ月後、ハービーはマイルス・デイビスのクインテットに参加することになる。

翌日、ハービーはバンマスのドナルド・バードと共にジミー・ヒースの『スワンプ・シード』の録音に参加する。当時、ハービーはジミー・ヒースとパーシー・ヒースと時々、ギグを行っていた。ハービーは、「ジャスト・イン・タイム」のジミーとドナルドのバックで、テレパシーのようなコンピングを見せる。それから８日後、ハービーは自身の２作目の録音に入ることになる。

3月19日、ハービーは、ブルーノートのスタジオに入り、２作目のリーダー作『マイ・ポイント・オブ・ビュー』の録音をした。今回は、バンマスのドナルド・バード（tp）に、レコーディング・セッションで仲良くなったハンク・モブレー(ts)、グラント・グリーン(g)とトロンボーンのグラシャン・モンカー」世とビル・エバンス・トリオのベーシスト、チャック・イスラエルと１７歳の驚異のドラマー、トニー・ウイリアムスとの７人編成だった。

４月１日、ハービーは、ケニー・ドーハム（tp）の『ウナ・マス』の録音に参加する。『ウナ・マス』は、ケニー・ドーハムの有名な人気盤である。このアルバムの重要な点は、ジョー・ヘンダーソン（ts,当時２５歳）とハービーとの初共演作品ということだ。他のメンバーは、バンド・メイトのブッチ・ウォーレン(b)にトニー・ウイリアムス（ds）だった。とても良いアルバムで、標題曲が特に素晴らしい！

さてハービーは、ジャッキー・マクリーンの『バァーティゴ』の録音で知り合って以来トニー・ウイリアムスとすっかり仲良くなっていた。何とトニーは、あっという間にマイルス・デイビス・クインテットのドラマーになってしまった。マイルス・クインテットには、ジョン・コルトレーンの推薦で入ったテナーのジョージ・コールマンとアート・ファーマーのバンドにいたベースのロン・カーターがいた。マイルスは、ロンが気に入り、マイルス自身がアート・ファーマーに頼んでスカウトしていた。

そしてマイルスは、いいピアニストを探していて、トニーはハービーを推薦した。興味を抱いたマイルスは、トニーを引き連れ、“ビレッジ・ゲイト”にハービーを見に行った。ハービーは、クラーク・テリー(tp)、セルダン・パウエル（ts）とすごく体のでかいジュディなんとか（ハービーは、ちゃんと名前を覚えていない）と出演していた。マイルスとハービーは、言葉を交わさなかったが、マイルスはしっかりとハービーをチェックして帰った。

しばらくしてトニー・ウイリアムスからハービーは、「マイルスが君を気に入ってバンドに入れたがっている。そのうちに電話がいくよ」と言われた。驚いたハービーは、バンマスのドナルド・バードに相談したら、「チャンスだから行け」って言ってくれた。そして本当にマイルスからハービーの元に電話がかかってきて、「明日、俺の家に来い！」と言われた。しかし、マイルスは住所を言わないし、聞けない。仕方がないから、ハービーは、トニーにマイルスの家を教えてもらった。翌日、マイルスの家に行くと、トニー、ロン・カーター（b)、ジョージ・コールマン(ts)が居た。マイルスはすぐ２階に上がってしまい、４人でリハーサルをした。その翌日も行くと、今度はギル・エバンスとフィリー・ジョー・ジョーンズが聞きに来ていた。マイルスはちょっとだけ吹くと、また２階に上がってしまった。３日目、４人の演奏に慣れてきたら、マイルスが２階から下りて来て、「おい、明日、レコーディングするぞ！」って言う。実は、ハービーの演奏はずっと２階で聞いていてチェックしていたのだ。ギルとフィリー・ジョーにも意見を聞くために、呼んでいた。この3日間がオーディションだったのだ。

翌日（5月14日）、コロンビアのスタジオに行って

録音したのが、『セブン・ステップス・トゥ・ヘブン』である。ついにハービー・ハンコック（p)、ロン・カーター（b)、トニー・ウイリアムス（ds）のリズムセクションが揃い踏みしたのだ。このサウンドをぜひ聴いて頂きたい！ここには、新しいジャズの風が吹いている！『セブン・ステップス・トゥ・ヘブン』にはビクター・フェルドマンがピアノを弾いているバージョンも入っており、ピアノや全体のサウンドを聴き比べるとその差は一目瞭然である。ビクター・フェルドマンは、「セブン・ステップス・トゥ・ヘブン」と「ジョシア」の作曲者である。イギリス出身で当時、ロサンゼルスのスタジオ・ミュージシャンとして大金を稼いでいた。才能あるミュージシャンだったが、マイルスと新しい音楽を創造するには適してなかったのだ。

（注：驚くべきことに2004年9月29日、『セブン・ステップス：ザ・コンプリート・コロンビア・レコーディングス・オブ・マイルス・デイビス1963-1964』という７枚組のボックス・セットが発売された。ここに作曲者のビクター・フェルドマン自身がピアノを弾いている「セブン・ステップス・トゥ・ヘブン」と「ジョシア」が収録されている。非常に完成度の高い演奏で、そのまま1枚のアルバムにするのにふさわしい演奏だ。逆にハービーたちは３曲しか録音してないので、１枚のアルバムにすることが出来ない。ハービーたちとの新しいサウンドがうれしくてしょうがないマイルスは、ビクター・フェルドマンがピアノを弾いている「セブン・ステップス・トゥ・ヘブン」と「ジョシア」をハービーたちとの演奏に差し替えたのだ。しかしながらこの2曲は（特に「ジョシア」は)、その後、マイルスの重要なレパートリーになっていった）

こうしてハービーは、マイルス・デイビス・クインテットのメンバーになった。ここからハービーの新しい冒険が始まった！レコーディングを終えたマイルスは、マネージャーのジャック・ウィットモアに連絡して、「いいバンドが出来たから、ライブの仕事をたくさん取るように！」と指示した。マイルスもハービーたちメンバーも燃えていた。

マイルスとの衝撃の録音の6日後、ハービーは、ドナルド・バードに呼ばれ、彼のブルーノート録音に参加する。メンバーには、ソニー・レッド（as)、ジミー・ヒース（ts)、アルバート・ヒース（ds）とユニークな人選だったが、録音テープはお蔵入りした。ところが1997年になって、ドナルド・バードの　CD『ブラックジャック』（６７年録音作品）に、１曲（「オール・ナンバース）だけ奇跡的にボーナス・トラックで追加された。

6月に入り、ハービーはマイルスとの最初のツアーに参加する。フィラデルフィア、ニューポート、セントルイスなどを回った。『マイルス・イン・セントルイス』は、そのときに録音された海賊盤だ。ハービーの故郷であるシカゴの「スザーランド・ラウンジ」にも出演したときは、ハービーの家族もその勇姿を一目見ようと駆けつけていた。

7月、マイルスは欧州ツアーを敢行する。この旅がハービーにとって初めての欧州だった。

ハービーの参加した『セブン・ステップス・トゥ・ヘブン』は、１０月にリリースされた。従って７月の欧州ツアーの時点では、リリースされてなかったので、ハービーやトニーたちを初めて目にした欧州ジャズ・ファンは、かつてない新しいステージに驚嘆した。マイルスは体調もよく新メンバーたちも燃え上がり、各地を熱狂の渦に叩き込んだ。『マイルス・イン・ヨーロッパ』は、そのときの貴重な記録である。フランスのアンティーブ・ジャズ・フェスティバルでのライブ録音である。帰国したマイルスは、2ヵ月後（9月20日）には、カリフォルニアのモンタレー・ジャズ・フェスティバルに出演した。これは『アット・モンタレー1963・コンプリート』という海賊盤が出ている。

マイルス・クインテットが大好評だった欧州ツアーからニューヨークに戻ると、マイルスは長い夏休みに入った。元気なハービーは、夏も休みなく活動を続けた。

8月13日、ハービーは、ブルー・ミッチェル（tp、1930年生まれ､1979年死去）の『ステップ・ライトリー』の録音に参加した。『ステップ・ライトリー』は、テスト盤までプレスされながらリリースされなかった。ミッチェルが亡くなった後、1980年になってやっとリリースされ、陽の目を見た。なぜリリースが見送られたのかは、わからない。メンバーには、ハービー以外にジョー・ヘンダーソン（ts)、レオ・ライト（as）が参加。リズムセクションは、当時ミッチェルが在籍していたホレス・シルバー・クインテットのジーン・テイラー（b）とロイ・ブルックス（ds）が選ばれた。

8月30日、ハービーは、3作目のリーダー作『インベンションズ&ディメンションズ』の録音をした。ハービーは、このアルバムを今までとは「何か違う」ものにしたいと考え、編成をベース（ポール・チェンバース)、ドラム（ウイリー・ボボ)、パーカッション（チワワ・マルチネス）の４人編成にした。初めて管楽器抜きのリーダー作・セッションになった。ハービーが５月にマイスル・クインテットに参加して以来のリーダー作だけに大変興味深い。

さて長い夏休みを終えたマイルスは、秋のロサンゼルスで、10月9日~10日､演劇「タイム・オブ・ザ・バラクーダズ」の音楽を作るために、ギル・エバンスと共に、レコーディングに入った。フル・オーケストラによる演奏である。ハービーたちマイスル・クインテットのメンバーもジョージ・コールマン以外は全員

呼ばれた。芝居の主役は、ローレンス・ハーベイで、昔からのマイルス・ファンだった。素晴らしい音楽をマイルスとギルは作り上げたが、芝居そのものが中止になってしまい、残念ながらこの録音も倉庫にお蔵入りになってしまった。ハービーは録音も楽しく、気候の温暖なロスが気に入った。お蔵入りして未発表だったが、この音源は『Quiet Nights』のボーナス・トラックとして遂に陽の目を見て、その後発売された6枚組のボックス・セット 『Miles Davis/Gil Evans The Complete Columbia Studio Recordings』にも収録された。

こうしてハービー・ハンコックは、マイルス・デイビス・クインテットに加入するという劇的な１９６３年を終えた。ハービーの新たな旅が始まったのである。

＜解説＞

『My Point Of View / Herbie Hancock』

1. Blind Man, Blind Man
2. A Tribute To Someone
3. King Cobra
4. The Pleasure Is Mine
5. And What If I Don't

Herbie Hancock(p),Donald Byrd(tp),Grachan Moncur 」(tb),Hank Mobley(ts), Grant Green(g),Chuck Israels(b),Tony Willams(ds)

ハービー（当時22歳）の2作目のリーダー作。本作は、デビュー作『テイキン・オフ』のコンセプトを発展させたもので、トランペット、トロンボーン、テナー、ギター、ベース、ドラムを加えた何と７人編成による作品である。冷静なハービーは、当初より自分のピアノを目立たせるのではなく、トータルで音楽を聴かせる作品作りを目指していた。本作でも参加した７人のメンバーを、いかに効果的に起用するかに工夫をこらしている。以下が、各曲別のメンバーのソロ交換である。１曲目：g→ts→p。２曲目：tp→ts→p。３曲目：tp→ts→tb→p →終わりのテーマ→ds。４曲目：p ソロのみ。５曲目：p →g → tp→ts。ハービーは、ソロの時間を我慢し、全員が、いい場面でソロを取るようにしている。１と５は、「ウオーターメロン」のファンキー路線を継承した曲である。テーマは、コール＆レスポンスを利用して、思わず踊りだしたくなるようなビートを刻んでいる。特に１で、先発するグラント・グリーンのギターの起用が効果的で、いい味を出している。次いでハンク・モブレーのテナーが充分なファンキーを醸し出し、絶妙なハービーのソロに替わる。ハービーのソロの後半は、アンサンブルがバックを取り、ハービーがさらに引立つ。２は、ハービーのバンマスのドナルド・バードが、美しいトランペットでテーマを奏でるバラード。ドナルドがハービーのアルバムに参加しているのは、このアルバムだけである。この美しいバラードは、ハービーが大学生時代の19歳のときに作った曲である。ドナルドとハンクの見事なソロの後、やっとハービーのソロが来る。リリカルなきれいなソロである。このタッチをマイルス・デイビスが認め、愛したのである。３は、高速テンポのスリリングな曲。スポーツ・カーで疾走しているような気分が味わえる。それもそのはず。ハービーは、「ウオーターメロンマン」のヒットにより、スポーツ・カー「シェルティ・コブラ」を買った。うれしくてしかたのないハービーが、愛車のために書いた曲が、この「キング・コブラ」であったのだ。ハービーのビル・エバンスを脱却したモダンなソロが聴ける。テーマで終わるかと思いきやトニーのエンジン音のような煽り立てるドラム・ソロに突入する。ジャケット写真が印象的で、ピアノを立てた横で、思案しているようなハービーが写って

いる。ニューヨーク生活にも慣れ、音楽仲間も増え、充実した日々の中で、一体どうやったらもっといい音楽を作れるだろうかと考え抜いて、制作されたアルバムだと思う。

『Inventions & Dimensions/ Herbie Hancock』
1. Succotash
2. Triangle
3. Jack Rabbit
4. Mimosa(Martinez out)
5. A Jump Ahead
Herbie Hancock(p) ,Paul Chambers(b),Wille Bobo(ds&timbales),
Osvaldo “ Chihuahua"Martinez(conga&bongo)

ハービー（当時23歳）の3作目のリーダー作。本作は、ハービーのアルバムの中でも、異色の作品である。前作『マイ・ポイント・オブ・ビュー』では７人編成だったが、本作では管楽器を外し、マイルス・バンドの先輩でもある名ベーシストのポール・チェンバース（まだ28歳だ）に、ラテン・ミュージック界からウイリー・ボボとチワワ・マルチネ
スの二人のパーカッション奏者を起用した。この二人は、所謂通常のジャズ・ドラムのバッキングをしない。このアルバムでハービーが目指したものは、自由に湧き上がるフィーリングを活かした完全な即興演奏だった。マイルス・バンドに加入して、３ヶ月経ち、全米ツアーと初の欧州ツアーを体験したハービーは、即興演奏の楽しさを体感していた。
では曲を聴いてみよう。１曲目の「サコタッシュ」は「トウモロコシの豆の煮付け」という意味である。6/8拍子の曲だが、ウイリーのブラッシュ・ワークの音が、ハービーにはまるで「サコタッシュ」「サコタッシュ」というように聴こえて来たと言うのだ。通常の演奏と違い、ハービーはエネルギッシュなコード・ワークを多用した珍しいソロを展開する。
2曲目の「トライアングル」（三角形）は、正に文字通り4/4～12/8～4/4とトライアングル構成になっている。ミディアム・テンポの曲だが、４ビートからやがてスムーズにアフロ・キューバンの雰囲気を湛えた12/8に移行する。爽やかな目の覚めるようなソロ構成である。
３曲目の「ジャック・ラビット」は、高速テンポの曲。ポール・チェンバースのどっ
しりしたベースとチワワのコンガを核に、タイトル名のように「雄のウサギ」がまるで走っていく（チェイサー）ように情景を感じる。熱いコンガ・ソロが挿入される。
４曲目「ミモザ」（合歓の木）は、きれいなコードを持ったバラード。やはりバックにボンゴが入り不思議な感じがするが、ハービーはまったく気に留める様子もなく実に美しいソロを展開する。そのうちに双方が溶け合い、何と言うかラテン・バラードになる。きれいなコード・パターンは、マイルスとのコラボレーションから生まれていたものである。ポールのベース・ソロも入っている。最後の曲「ア・ジャンプ・アヘッド」は、高速テンポの曲で、ハービーががんがんソロを取る。ここでの聴きどころは、ハービーとポールとの応酬である。ポールのベースが、「どんどんジャンプ・アップ」していくので、タイトル名を名付けたそうだ。
本作は、マイルスから学んだ実験精神を即興に活かした意欲作である。

以上

アナログにこだわる、銀座の老舗
「JAZZ　COUNTRY」
東京都中央区銀座６－２－６　ＴＥＬ．０３－３５７２－７６８４
営業時間：コーヒータイム　ＰＭ０：００～５：００（土曜日のみＰＭ２：００～）
バータイム　ＰＭ７：００～１１：００　休み：日曜祝日（バータイムは土曜日も）
交通：営団銀座線、丸の内線、日比谷線「銀座」駅、ＪＲ「有楽町」駅他
メニュー：コーヒータイム　珈琲・紅茶500円、ビール700円
バータイム　ボトル8000円（チャージ3000円）

気まぐれジャズマン 第18回

水戸守敬一郎

＜オートバイブームに乗って＞

最近、ある女性が言っていた。
「あの頃ブームに乗って、オートバイに乗っていた女って皆、なぜだか不幸になっているよね」

１９８１年頃、なぜか出版界を中心に、僕にはそう思えたのだが、オートバイブームがおこった。
僕には高校生の頃、ラジオ関東(今のラジオ日本)で深夜、「ミスターバイク」という雑誌を作っている編集プロダクション、「東京エディターズ」の人たちのモータースポーツを中心とする放送を聴いていて、オートバイもいいだろうな、と思うぐらいの下地しかなかった。
とつぜん編集者が、イラストの原稿をとどけに、モトクロッサーの姿で、オフロードバイクでやってきた。
オートバイの洗練さもさること、ヘルメット、グローブ、パンツ、そしてプロテクターをつけて、その姿に驚いてびっくりした。
すると小学校で教師をやっている院展の画家の年上の女性が、やはりオートバイで遊びに来たのだった。

知らなかった。オートバイはオシャレになっている。
ホンダの赤。ヤマハの白。スズキの黄色。カワサキのライムグリーン。プロリンクや、モノクロスなどのサスペンション。
僕もオートバイを足にすると都内を走り回るなら便利だろうなと思うようになっていた。
高校時代の友人が興味をしめして、片岡義男の小説の本をもって来たりした。
片岡義男のオートバイ小説はサーフィンと同様、細部をていねいに描いて、オートバイをロコツに、メーカーや車種などを出さず、乗ってみたいと、オートバイの事を知っている人にわからせて、とても、すてきな感じがした。

とにかく中型免許をとろうということになった。
ホンダのＶＴ２５０とヤマハのＲＺ２５０という４ストロークと２ストロークの高性能オートバイ対決がオートバイ雑誌をにぎわせている。
高校時代の友人は新聞社でバイトをしていて深夜、オートバイで帰ってくるにはとても便利だったのだった。
なるほど、深夜まで不規則になる出版の仕事には、オートバイはとても便利なツールであるのだな。

編集者の友人が５０ＣＣのオフロードバイクを貸してくれて、出版社にイラストをとどけたりする足にオートバイに乗るようになった。
交通費は安いし、車をすりぬけて走れるし、雨の日もカッパを着て、ずぶぬれになって走った。

バイク便という商売が現われ、オートバイも、ずいぶん広まってきた。
スーパークロス(モトクロスの曲芸的にすごい大会)が後楽園球場で開催され、ブームは女性にも受け入れられるようになった。
女性が大型オートバイに乗ったり、モトクロスを始めたりしだした。
堀ひろこさんがオートバイで、アフリカを横断して、オートバイグッズのショップを開いた。
タレントや芸能人が、カスタムショップやオートバイ・レースを始めたりしている。
風間深志さんの芸能界の仲間達や、清水国明氏、マイク真木氏、今でもオートバイに乗っているのだろうか。
オートバイで、ライフ・スタイルを語った人達はどうしているのだろうか。
そしてブームに乗って、オートバイに乗っていた女性は達はどうしているのだろうか。
それから僕は主に旅のために使ったオートバイを５台乗り換えて、そして売ってしまった。

カドやんのジャズ教室　Vol.22

門倉洸太郎

SEPTEMBER SONG　　９月の歌

Oh, it's a long, long while	それは永い間ね
From May to December	５月から１２月までは
But the days grow short	日差しは日に日に短くなるし
When you reach September	９月ともなれば
When the autumn weather	秋になり
Turns the leaves to flame	葉は色づき
One hasn't got time for the waiting game	待機をきめこむ時間もないし
Oh, the days dwindle down	日は短くなっていく
To a precious few	残された貴重な日々
September, November	９月、そして１１月
And these few precious days I'll spend with you	それで、この貴重な日々をあなたと過ごしたい
These precious days I'll spend with you	この貴重な日々をあなたと過ごしたい
Oh, the days dwindle down	ああ、日は短くなって
To a precious few	残された貴重な日々
September, November	９月、そして１１月
And these few precious days I'll spend with you	そして、この貴重な日々をあなたと過ごしたい
These precious days I'll spend with you	この貴重な日々をあなたと過ごしたい

JAZZCAT-RECORD
インターネット専門店です。
レコード 2,000 枚以上を写真で掲載中
お店の感覚で捜せます。

- ジャズ中古レコード販売（ボーカルも充実）
- YOKOHAMA-JAZZCAT レーベルより CD 発売
- 日本人アーチストの CD・レコード販売(直接アーチストから依頼されています)
- オーディオコーナー（売りたし・買いたし・求む）
- 中古 CD 販売

http://www.jazzcat-record.com

〒220－0051　横浜市西区中央 2－1－13　明光中央ビル 202
TEL＆FAX　045－312－4238

Take The メCモ Train　Vol. 2　　撮影：Ｍ．Ｔ．

A LETTER FROM THE BASSMAN

伊藤　潮

６月は、はや今年も折り返し地点です。結婚式の多い月ですが、なんと８組の新婚さんを音で祝福いたします。スケジュールは毎月パズルのようにやりくりして間際にフィックスするので、まだ出そろっていませんが、取り急ぎご連絡いたします。

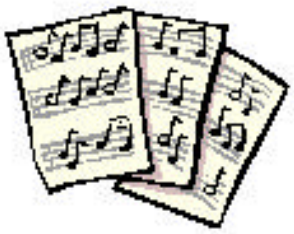
7/2（土）4（月）16（土）23（土）30（土）ヒルトン東京　セントジョージ
マリア・エバ　ラモーナ　井上ゆかり　峯野祐次　他
7/6（水）池之端　Qui　竹下ユキ
7/9（土）有楽町マリオン　藤家虹二オーケストラ
7/11（月）横浜　酔いどれ伯爵　宮之上貴昭
7/14（木）バードランド　鈴木和郎　三浦肇
7/17（日）パルテノン多摩　藤家虹二クインテット
7/25（月）南青山マンダラ　竹下ユキ　西直樹
8/3（水）池之端　Qui　竹下ユキ　西直樹
8/7（日）池袋メトロポリタン　渡辺明日香
8/11（木）バードランド
8/28（日）日比谷公会堂
9/9（金）立川ハーフトーン　大井貴司　吉岡秀晃

その他の日はお問い合わせ下さい。　伊藤　潮　090-8508-0924

あ・てんぽピアノ教室　講師：中村佳津子

本所教室　〒130−0004　墨田区本所1−31−8
電話03−3622−8674(日本そば砂場)　レッスン日　日曜・水曜・木曜

流山教室　〒270−0176　流山市加2−1−13
電話 FAX0471−50−1685　レッスン日　月曜・火曜



〔2005年の予定〕
11月20日(日)板橋、レストラン「すいぎょく」　おとなの発表会開催
2004年はおかげさまで20代青年2名が入会し、ますます張り合いで？させました。私もジャズピアノを始めたり、2台ピアノにチャレンジしたりと忙しい日々です。ちょっとの勇気で、日々の暮らしが変ります。思いてみませんか？　両教室とも実力を認める全日本ピアノ指導者協会の検定試験を受験することができます。
入会金3000円。月謝6000円より(本誌読者は入会金サービス)詳しい案内書は流山教室までご請求ください。メールアドレス　a−tempo@hi−ho.ne.jp

会員紹介

今回から、会員のご紹介をさせていただくコーナーを作りました。基本的な質問にお答えいただきます。記念すべき第１回目はＫＪＦＣの初代会長として会の創設に貢献され、現在もジャズにたいする博識とそのジェントルマンぶりで、文字どうりにＫＪＦＣの“顔”といえるＨ．Ｓ．氏にご登場いただきました。

（1）血液型、星座　　B型、牡羊座
（2）ジャズ歴もしくはジャズを初めて聴いたエピソード

ジャズ歴４２年、ジャズに益々傾倒する日々だが、この世界に誘ってくれた先達の人に付いて、この機会に書き留めておきたいと思う。その人を仮にＴ氏と呼ばせて貰う。１５－１６歳の頃だった、近所に居た４－５歳年上の人でアメリカンポップスを通しての繋がりがあった。ある時、家に遊びに行った折、家具の様なステレオからいつもと違ったしっとりとした心地よいサウンドが聴こえて来た。日本コロンビアがMGM原盤によってリリースしたジョージ・シアリングクインテットの「9月の雨」と「バードランドの子守唄」をカップリングしたＥＰだった。ジャズはラジオで耳したことがあったと思うが、この時が初めてジャズとの出会いだった。以降、T氏と断続的だったがジャズ談義やレコードの貸し借りが数年間続いた。後半頃にはT氏のレコード棚にはサボイのパーカー（セット物）をはじめ錚々たるアルバムが揃っていて一気にのめり込んでいる様子が伺われた。そんな矢先、Ｔ氏の移転で疎遠になってしまい４０年近くお会いしていない。近年、再会したい気運が高まって色々と手を尽くしたが実現出来ずに居る。
もし、ジャズと伴に在る日々を送られていれば、昨年始動したJAZZCAT-RECORDを通して巡り合う機会が訪れるかもしれない。そうなれば、ジャズを通じての繋がりによって素晴らしい人間関係が育まれて行く事になるのだが.....

（3）初めて聴いたジャズ・レコード

前記シアリングのレコードでジャズとの出会いにインスパイヤーされ、ジャズらしきものを求めて購入したダッド・ダメロンも偶然
の所産であった。初めて自分が求めて聴いたジャズ・レコードはジョン・コルトレーンの「MY FAVORITE THINGS」(ATLANTIC)である。
ジャズを聴き始めた頃はラジオが音源で、日本短波放送に「テイスト・オブ・ジャズ」と言う番組があった。そこで初めて聴いた。短
波放送なので音が小さくなったり大きくなったり最悪だったが、凄いジャズだと感じ何としてもレコードが欲しくなった。当時、アトランティックのコルトレーンは国内、海外問わず何れも入手困難、何店目かの電話後あの伝説のレコード店新宿「マルミ」に問い合わせると在ると言う。早速、花園神社近くの店に出向くが、新宿に疎く辿り着くまでに２－３回電話してしまい店主の鈴木さんに「あな
た、落ち着いて」と窘められた。店は洋品店の奥にあり壁の一部にジヤケットが飾ってあつた。レコードは７-８個のダンボールに収め
られておりレコード店と言う雰囲気は皆無、だがバリバリのブルーノートやプレステイジ他の輸入盤のもつ存在感が、その場だけスポ
ットライトを浴びたように輝いていたと思う。このアルバムを聴くとジャズに夢中だった当時が思い起こされる。

(4)座右の名盤「アミーゴ川上　トリオ＆デュオ」(私家盤)

９８年に惜しくも亡くなったジャズギタリスト川上和彦氏は生前アミーゴの愛称で呼ばれていた。８０年代＃＆♭のギターリストとして長期に渡って活躍する。９０年代以降はフリーランスとして様々なセッションに参加、ファンからもミュージシャンからもその高い音楽性や技巧を評価されていた。にもかかわらず氏のリーダー作は無い。ギターフリーク達はこうした状況に自ら行動を起こし、ライブスポットでマイクを立て記録したのが本アルバムである。トリオのメンバーは、アミーゴのギターに前記＃＆♭時代より親友の間柄であるジョー蒲池のピアノ、谷口雅彦のベース。実はこのセッション、アミーゴと谷口雅彦のデュオだったが後半遊びに来たジョー蒲池が急遽加わって大変貴重な録音となった。＃＆♭時代にリズムセクションを組んでいた二人、久々の再会セッションと成り息の合ったスイギーな好プレイが聴かれる。一方、デュオは小林陽一のベースと実に味わい深いギターサウンドを表出しており、各曲におけるスケール大きな唄わせ方が素晴らしい。エンディングは何時もの“THAT'S ALL"。伴に亡くなる数ヶ月前の録音、場所は六本木RELAXIN'である。

「CHARLIE PARKER / MELLOW BIRD WITH STRINGS」 NAXOS JAZZ LEGENDS 8.120700

香港に拠点を置くクラッシックの廉価レーベル“ナクソス”は主に現代ヨーロッパ中堅アーチストやオーケストラのデジタル録音による膨大なカタログを有して

いる私の好きなレーベルである。数年前からジャズの分野にも進出現在７０枚以上のアルバムをリリースしている。このＣＤは１９４９－１９５２年録音のウイズ・ストリングス２０曲が収められている。名曲の名演揃い。パーカーは徹底したインプロバイザー、殆んどの録音がジャムセッションの延長といった感じであり、このウイズ・ストリングスがアレンジの規制の中で無駄を省いた完璧と言えるソロが聴き手のイマジネイションをかきたてる。

「GREEN SLEEVES」jazz therapeutic 伊藤　潮トリオ＆デュオ　WOODY CREEK CD-1004

伊藤潮が長年に渡って温めていたコンセプトを嶋津健一、石井彰と言う最も旬なピアニストを迎え、ドラムスに名手渡辺毅を配した本作はミュージックセラピーは言うに及ばす、ピアノトリオの秀作としてこれほどイマジネーション溢れた演奏は稀である。平行して同トリオを迎えて会員の桑谷栄美子さんが主催した２００３年３月の草加でのライブ録音（私家盤)、伴に愛聴盤と成っている。

「THE SOUND OF SONNY」SONNY ROLLINS　RIVERSIDE RLP 12-241

ロリンズの愛聴盤は豪快な「WORK TIME」一辺倒だつたが近年はこのアルバムが大のお気に入りと成っている。唄物における鷹揚なアドリブ、リズムセクションの良さも特筆されていい。

「EARLY ART」 ART FARMER　　PRESTIGE 7665

トランペットのワンホーンアルバムで特に好きなＬＰ。５４年の１月と１０月の二つのセッションが収められている。オリジナル１０インチ二枚をカップリング。本命は１０月録音ウィントン・ケリー以下のサイドメンを従えて溌剌としたプレイが実に新鮮、ファーマー２６歳時の快演集である。

「I REMEMBER YOU」 FURANKIE RANDALL RCA VICTOR LSP-3513

２０年来の愛聴盤。現在６５歳位、近年フランク・シナトラの後継者としてコンサート活動を始め中々盛況の様である。RCAに５枚のアルバムの内、ストレイトな歌唱と選曲の良さ、加えてフランク・ハンター、マニー・アルバムのアレンジによって一番聴きごたえがある。このアルバムを教えてくれたＳ氏に感謝。

（５）好きなプレイヤー
アレン・イーガー

アーリーモダンにジャズの最良の瞬間があると信ずる者にとってアレン・イーガーの存在は実に魅力的である。パーカー、レスターの影響をうけ自己のスタイルを確立、４０年代における際立ったインプロバイザーであった。テンションのなかにもくつろぎがあるアドリブに魅了される。サボイの１０インチ２枚からセレクトした「EARLY DAYS」（CBS/SONY盤)、バディ・リッチオーケストラでソロの聴ける「IN TOBEPOP」（ELEC盤)、レッド・ロドニーのキーノート盤、等々殆んど収集した。そのどれもが愛着のある物ばかりである。従ってテナーの好みはスター系、セルダン・パウエル、ハービー・スチュワード、リッチー・カミューカ、新しい所ではスパイク・ロビンソン、フレイサー・マックファーソンなどである。
ミルドレッド・ベイリー

かつて健筆を振るっていた粟村政昭氏の企画をソニーのデック・シリーズで実現した「NIGHT IN MANHATTAN」mildred bailey・lee wileyで初めてベイリーと出会った。聴く内に一生付き合えるアーチストだと感じた。前記アルバムA面に収めた１０インチ「SERENADE」を求める旅が始まり、運良くジョージア在住のコレクターから譲り受けた。
以降、彼女のアルバムやＣＤは悉く収集している。ベイリーの魅力はどの様な曲でも自分のものにしてしまうオリジナリティがあることであろう。それが少し高めの澄んだ女らしい可愛い声と相俟って語りかけてくる。The lonesome road, I let a song go out of my heart, thanks for memory, lover,come back to me,.....

（６）レコード、ＣＤ所有枚数
レコード約５０００枚内クラッシック他８００枚。ＣＤ約１０００枚内クラッシック２００枚。

（７）ジャズ以外のご趣味
１．クラッシック

聴き逃したくない日本のオーケストラが二つある。宇野功芳指揮/アンサンブル・SAKURAと三石精一指揮/ユニバーサル・オーケストラである。
宇野功芳/アンサンブル・SAKURAのコラボレーションは１９９６年７月７日上野にある石橋メモリアル・ホールでのコンサート、その時が初めての出会いだった。音楽に寄せる並々ならない情熱が“エロイカ”で完全燃焼と言っても過言ではない、それはそれは素晴らしい体験だつた。過日、事務所でその時の録音を聴

き過っての感動が蘇った。音楽との係わりは須らくこうした経緯であるべきだと思った。

２．映像

映画に特別な興味は無かったが、９０年代に入って川島雄三と出会った事により一気に日本映画のファンになった。今、友人達と週１－２回プロジェクターによるミニ映画会を行っている。好きな監督は川島雄三、増村保造、浦山桐郎、中平康、成瀬巳喜男、その他マイナーな人達にも傾注し少しずつ作品を集めている。

（8）ジャズに対するご意見

３年前の５月忽然と３３年間の会社生活が終わった。昨年からジャズを生業とする生活が始まった。アナログの循環と日本のジャズを記録する、という事に係わっている。会社生活の終焉と同時に殆んどの関係が切れた。新しい境遇に入ったのだから新たな関係を形成すべく心がけ、今年３月から関内にあるカフェーギャラリー“アルジマウケ”でそうした人達とライブがスタートした。ピアノが無いがここでしか出来ないライブと言う切口で企画を立てている。
今まで行ったライブと今後のスケジュールを報告させて頂きます。

３月　岩見淳三トリオ、４月　出口辰治カルテット、５月　宮之上貴昭&伊藤潮、と行い。アートとジャズの相乗効果に依っていい雰囲気が出来つつあるが、何と言っても出会いの範囲が拡がって行くことが何とも嬉しい。

７月１６日　山口新語トリオー（ＴＳ）ジエームス・マホーン、（B）ブレント・ナッシー、（D）山口新語、ライブスポットではまず聴けないサックストリオのセッション。

８月１３日　吉岡かつみトリオー（P）吉岡かつみ、（B）嶌田憲二、（D）山口新語、北九州で活躍する新進女流ピアニストの横浜での初ライブ。　於　桜木町 「ドルフィー」

（9）その他

ＫＪＦＣは１９７６年3月１１日スタートだから間もなく３０年目を迎える事になる。発足当初からのメンバーに加え、近年序徐々
に新しい方々も参加され例会、会報「GROOVY」も充実して来ている。自分にとってジャズ感や好みを越えて集えるこの会は何物にも変
え難い物となっている。是非、記念ライブを開催したいと思っている今日この頃です。

コンサートのお知らせ

M．T．

ＫＪＦＣの皆様こんばんわ。澤村です。多摩ジャズ・ワークショップオーケストラに入団しまして１年になりました。
私の腕の方はさっぱりですが、他のメンバーの皆さんはなかなかの腕前と思っています。
７月3日に小田急線新百合丘でジャズ・ファクトリー・オーケストラと合同でリサイタルを行ないます。こちらはもっと永い経験者が多いオーケストラです。指導者は同じで両方に入っているメンバーも多いです。どちらも５０人以上メンバーがいます。５０人以上の編成が２組と、選抜された２０人編成のグループ２組という４つのバンドで演奏する予定です。ゲストでプロの方４人をお願いしています。ビッグ・バンドで演奏されていることが多いようで知らない方が多いですが。竹野昌邦ＴＳ　今尾敏道ＡＳ、伊勢秀一郎ＴＰ，三塚貴ＴＢの４人です。
私の音はとんでもない間違いをしない限り聞こえないとは思いますがかなり楽しく超ビッグ・バンド・ジャズを聴いて頂けると思いますので遠いところでありますが是非おいで下さい。実は４５０人位入れるホールを借りましたのでイッパイになるかどうか心配しているところです。よろしくお願いします。

７月３日（日）午後４時開演（もちろん無料です、交通費を出さないといけないくらいです）
会場　　新百合トエンティワン・ホール
　　新百合ヶ丘駅新宿から見て右側に下車　徒歩　１分

RED GARLANDの魅力について　第20回

プレステッジ時代のトリオ・アルバム　Vol.2

紅　我蘭堂

前回「ガーランドの最大の魅力のひとつは、親しみやすいメロディーを持っていることです」と、代表作を3枚ご紹介させていただきました。その際に「ガーランドのプレステッジ時代のピアノ・トリオアルバムはこの3枚をお聴きになれば充分。他にも10数枚のアルバムがあり、そのそれぞれにも良い点はありますが、ガーランドの特長なり魅力を体験できるのはこの3枚。残りのアルバムは余禄というかおまけというか蛇足です。機会があれば聴いていただきたいのですが、無理してお買い求めになる必要はありません。そのような時間とお金があれば他の人のレコードを聴くなり買うなりされたほうがましです」と最後に書きました。随分と横柄で乱暴な言葉だったと思われたかもしれません。もう少しくだいて言いますと、私のようなガーランド・フリークにとっては、確かにすべてのアルバムが愛しいレコードなのですが、好き嫌いと良い悪いは区別しなければいけません。評論家やジャズ喫茶マスターのように、プロとしてジャズに関われる時間が多く取れる人は別として、一般のファンは時間もお金も限りがありますから、ガーランドのプレステッジ時代のトリオ・アルバムは最小限に抑えて、他のアーティストのアルバムをお聴きになったほうがバランス良くジャズを楽しめるという老婆心から述べた言葉であることをご理解ください。

その余禄・おまけ・蛇足アルバムをご紹介いたしましょう。紹介する順番はレコード発売順ではなく、録音日順です。

THE P.C.Blues(PRESTIGE PR7752)
RED GARLAND(p), PAUL CHANBERS(b), ART TAYLOR(ds) ,"PHILLY" JOE JONES(ds)(B1のみ) A3は1957年3月22日録音。A2,B1,B2は1957年8月9日録音。B1は不明。
Side A 1)AHMAD'S BLUES 2)LOST APRIL 3)WHY WAS I BORN?
Side B 1)TWEEDLE DEE DEE 2)THE P.C. BLUES

多分1970年に「お待たせっ！」という感じで発売されたアルバムですが・・・、何とも雑な造りのアルバムでして、潔癖症な方ならまず怒り出したり、レコードを叩き割っていることでしょう。まず前回ご紹介した「レッド・ガーランズ・ピアノ」と「グルーヴィ」録音時の残りテープをかき集めて1枚のアルバムにしてありますが、それはまあ許せます。A面2曲目と3曲目に続けてバラード曲を入れたのもアルバム構成上ダサいと思いますが、これも収録時間の都合かなと想像できます。ルディ・ヴァン・ゲルダー録音が泣いている、無理やり“擬似ステ”になっているのも、出してくれただけでもありがたいか、と自分をごまかせます。ジャケットとレーベルのA面・B面が間違っているのも「ワインストックちゃん、またやっちゃったね」と、怒る気にもなりません。そして吹けば飛ぶようなペラペラな薄い盤が、もの悲しいと言えばもの悲しいです。

この４重苦、５重苦にあえぐ“トホホ以上にトホホ”なアルバムですが、B面2曲があるために、私にとっての大名盤となっています。特に50年代初頭にラヴァーン・ベイカーという人がヒットさせたというポップス曲らしい「トィードル・ディー・ディー」は私としてガーランド５大名演奏の１曲として愛聴しています。このミディアム・テンポのスインギーな演奏は・・・恐らく誰も真似できないと思います。何かいやなことがあった日で、時間に余裕がある時は繰り返し聴いて、気持ちをリセットしています。

Red Garland Rivisited!(PRESTIGE PR7658)
RED GARLAND(p), PAUL CHANBERS(b), ART TAYLOR(ds), KENNY BURRELL(g)
A3,B3のみ 1957年5月24日録音
Side A 1)BILLY BOY 2)EVERYBODY'S SOMEBODY'S FOOL 3)FOUR 4)YOU KEEP COMING BACK LIKE A SONG
Side B 1)HEY NOW 2)THE MASQUEARADE IS OVER 3)WALKIN' 4)IT COULD HAPPEN TO YOU

“レッド”・ガーランドの本名は“ウイリアム”・ガーランドです。通常アメリカではウイリアムの愛称はビリー。だからこそ彼には、いわゆるトラディショナルと呼ばれている作曲者不詳の伝承曲「ビリー・ボーイ」を演奏する権利があるし、ガーランドも好んで何度も録音しています。ここではその初演を聴くことができます。適度なテンポで繰り広がるガーランド節の乗り具合が、いつものように堪りません。『YEAH！YEAH！』連発モノです。この曲だけは絶対に吉岡秀晃以外のプレイヤーに弾いてほしくないです。また他のプレイヤーではこのガーランド流を再現することはできないと断言できます。この曲もガーランド５大名演奏の1曲です。

このアルバムも何故か1969年ころまでお蔵入りになっていました。これまたヴァン・ゲルダーも怒っているであろう、誰も喜ばない擬似ステだし、時間稼ぎのつもりかB1は「グルーヴィ」に収録されているものを再掲しているという具合に、本当にプレステッジというレーベルは困ったものです。ですが、恐らく最初で最後であろうケニー・バレルとの共演2曲や、比類なく美しい4曲のバラードなどもあり、手放せない1枚であることは間違いありません。

It's A Blue World(PRESTIGE PR7838)
RED GARLAND(p), PAUL CHANBERS(b), ART TAYLOR(ds) 1958年2月7日録音
Side A 1)This Can't Be Love 2)Since I Fell For You
Side B 1)Crazy Rhythm 2)Teach Me Tonight 3)It's A Blue World

これも７０年になってようやく日の目を見たアルバムです。内容は典型的なスタンダード曲集で、ジャズに心地良いテンションやアーシーな雰囲気を求める方にはお薦めできません。コルトレーンの名盤「ソウルトレーン」と同日に録音されました。1日で2枚分の録音とは、レコード会社がこき使っているのか、ミュージシャンがタフなのか分かりませんが、内容はいいです。

アルバムは、どの曲も軽快なガーランド節が散りばめられ、チェンバースのソロなども随所に挿入されていて、トリオ演奏としては文句の付けようがありません。でも緩急が不足しているだけに、どうしてもＢＧＭのように、さらっと聴き流すようになってしまいます。これはそういうレコードなのです。

今日これまでご紹介してきた３枚のアルバムはすべて録音から１０年ちょっともお蔵入りしていた訳ですが、この辺はプレステッジの社内事情があったのでしょう。簡単に言うとこれまでハードバップ路線を進んでいたボブ・ワインストックが１９５８年に第１線から身を引き、代わったプロデューサーがより大きなヒットが期待できるソウル・ジャズ路線などに重点を置いたということが言えます。もちろんガーランドのレコードは出続けるのですが、この３枚は大きな波の中に飲みこまれてしまって埋没したのでした。

Manteca(PRESTIGE PR7139)
RED GARLAND(p), PAUL CHANBERS(b), ART TAYLOR(ds) ,RAY BARRETTO(conga)
1958年4月11日録音
Side A 1)Manteca 2)S'wonderful 3)Lady Be Good
Side B 1)Exactly Like You 2)Mort's Report

すっかりおなじみとなったトリオにコンガのレイ・バレットがプラスされた演奏。アフロ・キューバンか何か知らないけれど、せっかくのピアノトリオ演奏がコンガで台無しにされています。これは想像の世界の話しですが、ガーランドの演奏がマンネリと感じたレコード会社が変化を付けるためにコンガを加えたのかもしれません。あるいは当時アメリカではキューバ音楽やカリビアン音楽が流行していて、便乗しようとしたのかもしれません。「実験作」と言えば聞こえはいいかもしれないが、私は失敗作であると思うし、今回紹介した前述の３枚をお蔵入りさせても、このアルバムを正規発売した感覚が理解できません。事実この後６月２７日と８月２２日にも同じメンバーで録音されていますが、６月２７日の分は封印されて、８０年代に入ってから発表されました。どうもネガティブな話しになってしまって申し訳ありませんが、カーティス・フラーとディジー・ガレスピー作曲のＡ１はともかくガーシュインの名曲《スワンダフル》や《レディ・ビー・グッド》のしっとりした演奏のバックにパカポンポン、チャカポンポンなどとノウテンキな音が加わっていて、良い訳ないと思うのです。アメリカ人と日本人の差と言われれば、それまでかもしれないけれど、多くの人にお薦めするわけにはいきません。

（この項つづく）

RECORD CONCERT REPORT

２００５年2月１８日（金）「映画館」ア・ラ・カルト

1．ルネ・ユルトルジュ・トリオ
2．ブルースニック／ジャッキー・マクリーン
3．ザ・サーモン／ジミー・スミス
4．ダイナミック・デュオ／ジミー・スミス
5．フォー・ラバーズ／土濃塚隆一郎　他

逝去したジミー・スミスを偲んで、お店にあるアルバムを何枚か掛けてもらいました。６名集まって、なかなか楽しい会でした。

２００５年2月２６日（土）「ジャズカントリー」

特集：フランスのジャズ　-そしてパリのアメリカ人-　　担当：石井宏一

ジャズ発祥の地といわれるニューオーリンズは、ルイジアナ州南東部のミシシッピ川河口にある港町だが、イギリスが進出する以前はフランスの植民地であり、現在でもクレオールと呼ばれるフランス色の濃い文化が残っている。

そこから類推すれば、ジャズが生まれる背景には、幾分かフランスの影響があったのではないだろうか。

この地は、1699年にフランス人探検家が到来して以来入植が始まった。元の地名はフランスの領主オルレアン公にちなんでヌーベル・オルレアンといい1803年にルイジアナ購入にともない合衆国領となった。1810～50年代にはミシシッピ川を航行する蒸気船で賑わい、アメリカ有数の港に成長していく。

アメリカに生まれたジャズは、今や遍く世界に行き渡った観があるが、ヨーロッパでもっとも早くからジャズを受容してきたのはフランスだと言える。

アメリカで最初にラグタイムの楽譜が出版されたのは1887年といわれるが、そうした情報に惹かれてドビュッシー、ストラビンスキー、ミヨー、サティーなど、フランスのクラッシック作曲家たちは早くも譜面を求め、自らの曲にも"ジャズ"を取り入れようとした。

しかし、譜面に表現されたものでは、ジャズのダイナミズムを再現することはできない。フランスのジャズ評論家ボリス・ビアンは「少なくとも1935年頃までフランスに本物のジャズはなかった」と言っている。ここで35年をひとつの区切りにしているのには大きな理由がある。この頃から伝説のギタリスト、ジャンゴ・ラインハルトの活躍が注目されるようになってきたのである。

そして同時期に「本国」アメリカよりも早く、ジャズ評論やディスコグラフィー研究といった著述の分野がフランスで確立していく。

1940年から第二次世界大戦末まで、フランスはナチスドイツに占領され、ジャズの禁止令が出されるが、夜な夜な密かにジャズパーティーが開かれ続けたという。

第二次世界大戦後になって、イギリスでは演奏家の組合がアメリカのミュージシャンの国内演奏に抵抗した。そのため、フランスにはドイツやイギリスよりもはるかに多くのジャズプレーヤーが訪れ、なかには定住してしまう者まで現れて、豊穣なジャズの実りを見せることになる。

本日の演奏

1.High society（et Claude Luter 1948 Blue Star 78rpm 93,101,107）
　Sidney Bechet and his orchestra
2.La vie en rose(La vie en rose 1952-53)
　Bernard Peiffer(p)　Pierre Michelot(b)　jean-Louis Viele(ds)
3.Memory of a dream(Play standards 1954 Barclay LP 84 008)
　Bernard Peiffer(p)　Jean-Marie Ingrand(b) Roger Paraboschi(ds)
4.Rhumblues(Oscar Pettiford sextet 1954 Swing M 33.326)
　Oscar Pettiford(b)　Al Cohn(ts)　Kai Winding(tb)　Tal Farlow(g)　Henri Renaud(p) Max Roach(ds)
5.Budo(Joue Bud Powell 1955 Barclay LP 84 003) Rene Urtreger(p)　Benoit Quersin(b)　jean-Louis Viele(ds)
6.You are too beautiful(GO-go-Goragguer 1956 Philips LP 77 307)
　Alan Goraguer(p)　Paul Rev_re(b)　Christian Garros(ds)

7.Oblique(Kenny Clarke's sextet plays Andr_ Hodeir 1956 Phlips LP 77312)
Kenny Clarke(ds) Andr_ Hodeir(arrangements) Hubert Rostaing(as) Armand Migiani(bs) Martial Solal(p) Jean Warland(b)
8.Blue n' boogie(Tilt 1957 Swing LDM30.058)
Barney Wilen(ts) Maurice Vander(p) Bibi Rov_re(b) Al Levitt(ds)
9.Polka dots and moonbeams(Ren_ Urtreger trio 1957 Versailles STDX 8008)
Ren_ Urtreger(p) Paul Rovere(b) Al Levitt(ds)
10.Three a.m(3.a.m 1958 Pretoria 30 J 3000)
Georges Arvanitas(p) Doug Watkins(b) Art Taylor(ds)
11.Django(Django 1962 Barclay LP 84 089)
St_phane Grappelli(violin) Pierre Cavalli(g) Guy Pedersen(b) Daniel Humair(ds)
12.Cherokee(Round about a bass 1963 Mercury LP 125 500)
Maurice Thomas,Fred G_rard(tp) Rogger Guerin,Maurice Thomas,Fred G_rard(tp)
Charles Verstraete、Raimond Kalazynski((tb) Michel Portal(as) Maurice Vander(p) Pierre Michelot(b)
13.The champ(Dizzy Gillespie the double six of Paris 1963 HCE-3078 Phlips CD)
Dizzy Gillespie(tp) Bud Powell(p) Pierre Michelot(b) Kenny Clarke(ds)
14.Pentacostal feeling(Pentacostal feeling 1966 Philips LP 70 326)
Lou Bennett(org) Ren_ Thomas(g) Kenny Clarke(ds) Donald Byrd(tp)
15.Just one of those things(HUM 1960 V_GA V 30 S 837)
Daniel Humair(ds) Ren_ Urtreger(p) Pierre Michelot(b)
16.Communion(From in to out 1970 Futura GER 16)
Dizzy Reece(tp) John Gilmore(ts) Siegfreid Kessler(p) Patrice Caratini(b) Art Taylor(ds)
17.Little Sue(What's matter now 1970 Futura GER 21)
Jean-Philippe Blin(p) Fran_ois mechali(b) Jean-Jacques Schnell(ds)
18.Pop wine(Pop wine 1971 Futura GER 26)
Ted Curson(tp,ptp) Gerges Arvanitas(p) Jacky Samson(b) Chrles Sadrais(ds)
19. Stella by starlight(Matial Solal at Newport '63 1963)
Martial Solal(p) Teddy Kotick(b) Paul Motian(ds)
20. Syotanka(1979 OWL 016)
Daniel Humair (ds,zildjaian cymbals,syntoba) Fran_is Jeaneau (ts,as,ss,f) Henri Texier(b)
21. Days of wine and roses(1981 OWL 025)
Michel Petrucciani(p) J.F.Jenny-Clark(b) Aldo Romano(ds)

付録-1 **Futura Records Checklist**

compiled by François Ziegler

December 1998 (last update: March 2004)

with help from Gerd Heinlein and Ed Maurer, and special thanks to Gérard Terronès.

Please note:

This is not a sales catalog, it's a research help for discographers. (The latest catalog is here.)

GER (LP)	GER (CD)	ARTIST	TITLE	ORIGIN	REC.	Playing Member
10		Siegfried Kessler	Live At The Gill's Club		69	
11	11	Georges Arvanitas	Trio In Concert		69,70	Georges Arvanitas(p) Jacky Soamson(b) Charles Saudrais(d)
12		Michel Portal & John Surman	Alors!!!		70	Michel Portal(as,bc) John Surman(bs,ss,bc) Barre Phillips(b) Stu Martin(ds) Jean-Pierre Drouet(per)
13	13	Mal Waldron	Blood And Guts		70	
14		François Tusques	Piano Dazibao		70	
15		Barre Phillips	Basse Barre	= Music Man SMLS 601	68	
16		Dizzy Reece & John Gilmore	From In To Out		70	Dizzy Reece(tp) John Gilmore(ts) Siegfried Kessler(p) Patrice Caratini(b) Art Taylor(ds)

GER (LP)	GER (CD)	ARTIST	TITLE	ORIGIN	REC.	Playing Member
17		Burton Greene	Celesphere		70	
18		Joachim Kühn	Solos		71	
19		Perception	Perception		71	
20		Mal Waldron	The Opening		70	Mal Waldron(p)
21	21	Jean-Philippe Blin	What Matter Now?		70	Jean-Philippe Blin(p) François Mechali(b) Jean-Jacques Schnell(d)
22		Steve Lacy	Wordless		71	
23		Anthony Braxton	Recital Of Paris		71	
24	24	Jacques Thollot	jeter la girafe à la mer		71	
25		Manuel Villaroel	Septet Machi Oul: Terremoto		71	
26	26	Ted Curson	Pop Wine		71	Ted Curson(tp) Georges Arvanita(p) Jacky Samson(b) Charles Saudrais(d)
27		Paul Van Gysechem	Aorta		71	
28		Mico Nissim	Glucose confectionnerie		71	
29		Jaki Byard	Live At The Jazz'Inn		71	
30		Siegfried Kessler	Solaire		71	
31						
32		François Tusques	Piano Dazibao No 2		71	
33		Jef Gilson	Le Massacre du Printemps		71	
34		Sahib Shihab & Jef Gilson	La marche dans le Désert		72	
35		Pierre Favre	Abänänä		72	
36		Jimmy Gourley			72	
37						
38	38					Georges Arvanita(p,ep) Jacky Samson(b) Charles Saudrais(d)
39	39	Georges Arvanitas	Live Again		73	
40		Steve McCall	Chicago Solo		72	
41	41	Dexter Gordon & Sonny Grey	College Of Education: Parisian Concert		73	Sonny Grey(tp) Dexter Gordon(ts) Georges Arvanitas(p) Jacky Samson(b) Chales Saudrais(ds)
42		Chris Woods	Chris Meets Paris Meets Chris		73	Chris Woods(f,at) Georges Arvanita(p) Jacky Samson(b) Charles Saudrais(d)

Futura Swing

SW (LP)	SW (CD)	ARTIST	TITLE	ORIGIN	REC.	
1		Hal Singer	Blues And News		71	
2		Jean-Claude André	At Home		71	
3	3	Freddie Redd	Under Paris Skies		71	Freddie Redd(p) Didier Levallet(b) Didier Carlier(d)
4		Irakli de Davrichewy	Abide With Me		71	
5		Jaki Byard	Parisian Solos		71	
6	6	Ben Webster	Autumn Leaves		72	Ben Webster(ts) Georges Arvanitas(p) Jacky Samson(b) Charles Saudrais(d)

RED (LP)	RED (CD)	ARTIST	TITLE	REC.
1	1	Red Noise	Sarcelles-Lochères	70
2		Mahogany Brain	With Junk Saucepan	70
3		Triode	On n'a pas fini d'avoir tout vu	71
4	4	Fille Qui Mousse	Se taire pour une femme trop belle [LP UNISSUED]	71
5		Yves Touati	Le Voyage en printemps	72
6		Travelling	Voici la nuit tombée	73

SON (LP)	SON (CD)	ARTIST	TITLE	REC.
1	1	Raymond Boni	L'oiseau, l'arbre, le béton	71
2		Semool	Essais	69-71
3		Horde Catalytique pour la Fin	Gestation Sonore	71
4		Jean Guérin	Tacet	71
5		Bernard Vitet	La guêpe	71
6	6	Jacques Berrocal	Musiq Musik	71,72

Futura Voix

		ARTIST	TITLE	REC.
1		Théâtre du Chêne Noir	Aurora	71

Reissue Series (not to be confused with the Musica 2000 Series)

FUT		ARTIST	TITLE	ORIGIN	REC.
2007			Trio In Concert	= GER 11	69,70
2020		Steve Lacy	Wordless	= GER 22	71
2031		Hal Singer	Blues And News	= SW 01	71
2032		Jean-Claude André	At Home	= SW 02	71
2040		Jaki Byard	Parisian Solos	= SW 05	71
2041		Ben Webster	Autumn Leaves	= SW 06	72
2053		Georges Arvanitas	Live Again	= GER 38 + GER 39	73
2054		Dexter Gordon	College Of Education: Parisian Concert	= GER 41	73

Label established by Gérard Terronès. Reissues on Musica, EPM, and Fractal.
Dates in dark reddenote reissued material. Items in green cells need confirmation.

２００５年３月18日（金）「映画館」 ア・ラ・カルト

1．イン・コペンハーゲン／ローランド・カーク
2．スタディ・イン・ブラウン／クリフォード・ブラウン&マックス・ローチ
3．ビッグ・スイング・フェース／バディ・リッチ
4．デイス・イズ・ジャズ／メイナード・ファーガソン
5．ザ・ビッグバンド・オールスターズ・アット・ザ・カーネギー・ホール
6．イン・ニューヨーク／弘田三枝子
7．ザッツ・イット／ブッカー・アービン
8．ライブ・イン・５デイズ・イン・ジャズ・１９７４／水橋　孝

弘田三枝子の「スタンダードを唄う」というＣＤを五楼庵さんが持ってきたので、多いに盛り上がりました。またカドやんのリクエストで８を掛けてもらいましたが、大友義雄さんのアルトサックスが最高な「ウェン・ア・マン・ラブス・ア・ウーマン」に全員あらためて聴き惚れました。初めてお見えになった方を含めて９名も参加し、にぎやかどころか座る席もきつい感じで、熱気がある例会でした。

２００５年3月２５日（土）「ジャズカントリー」

特集　誰でも出来るジャズ喫茶マスター　第２弾　　担当　Ｙ．Ｓ．

昨年７月のＫＪＦＣ例会は,我蘭堂氏が担当で「特集？　私の好きな曲」でした。

その時の主旨は、「通常の例会では担当者がテーマーを決めレジュメを書き、それに沿った選曲をかけるスタイルで、参加者があまりお喋りも出来ないアカデミックな３時間ですが、たまにはレコードをかける方も聴く方も自由にのびのびとやってはどうか」と、言うものでした。

そして我蘭堂氏の好きな曲がＢＧＭとして２６曲流れたのですがこの企画が好評で、特集の合間にたまにはこのスタイルも良いのではないかと『誰でも出来るジャズ喫茶マスター』シリーズにしようと言うことになり、第２弾を私が担当する事になりました。

通常のジャズ喫茶ではＬＰの片面をかけるのが通例ですが、限られた時間内に私の好きな演奏家の曲を１曲でも多く聴いて頂きたいとの欲張りから、「１曲がけ」をする事にしました。

そこで問題があり、ＬＰ、ＣＤの１曲がけは大変面倒なので最近の例会の担当者が行っているＬＰ，ＣＤをＣＤＲにコピーしてかけるという方法があるのですが、私の家にはＬＰをコピーする方法がありませんので、やむを得ずＣＤからのコピーになりました。

ところが、私はアルバムのほとんどをＬＰで持っているので、数少ないＣＤからの選曲になってしまいました。

一応選曲は３曲ごとに「ピアノ」とか「オルガン」といった全部で９つのグループに分け、全２７曲をＢＧＭとして続けてかけます。

どの曲も好きな演奏家の好きな曲ばかりで、私なりにこだわりを持ったつもりですが、ＢＧＭなのでスタンダード・ナンバーを中心に聴き易い選曲にしました。

今宵は呑むよしお喋りよし、サロン風にジャズをお楽しみ下さい。

『本日のメニュー』

※まずは、「知られざるピアニスト達」のトリオ演奏から
曲名 /　　演奏家 /　　[アルバム名]
(1) SECRET LOVE / Don Scaletta / [ALL IN GOOD TIME !]
(2) SOUL SISTER / Harold Corbin / [SOUL BROTHER]
(3) SPEAK LOW / Alex Kallao / [AN EVENING AT THE EMBERS]

※数少ないヴォーカルCD から
(4) PRELUDE TO A KISS / Dee Dee Brigewater / [PRELUDE TO A KISS]
(5) SOFTLY AS IN A MORNING SUNRISE / Dianne Reeves / [THE NEARNESS OF YOU]
(6) DINDI / Sarah Vaughan / [COPACABANA]
※最近凝っているオルガンで､(9)は友人のエディの最新アルバムから
(7) ON A CLEAR DAY YOU CAN SEE FOREVER / Shirley Scott / [ON A CLEAR DAY]
(8) MISTY / Richard "Groove" Holmes / [SOUL MESSAGE]
(9) BLACK ORPHEUS / Eddie Landsberg / [THEM THAT SWINGETH]
※好きなギタリスト達で(12)はジャマイカのギタリスト

(10) STELLA BY STARLIGHT / Grant Green / [I WANT TO HOLD YOUR HAND]
(11) AUTUMN IN NEW YORK / Kenny Burrell / [BLUE LIGHTS]
(12) JORDU / Ernest Ranglin / [GUTITAR IN ERNEST]

※ 日本人の演奏家の中で、KJFCに関係のある演奏家のアルバムから。(14)には伊藤　潮さんが参加しています。
(13) ALONE TOGETHER / 小西　徹 / [A LIFE]
(14) MOANIN / 田村　翼 / [SWEET & LOVELY]
(15) YOU AND THE NIGHT AND MUSIC / 遠藤　律子 / [FRV !]

※この辺でちょっとジャズから離れてボサノヴァを
(16) CORCOVADO / Elis Regina / [ELIS & TOM]
(17) BUT NOT FOR ME / Nara Leao / [ONDE E QUANDO]
(18) COISAS DO BRASIL / Leila Pinheiro / [COISAS DO BRASIL]

※これも好きなトランペッターのアルバムから
(19) BOOK'S BOSSA / Donald Byrd / [SLOW DRAG]
(20) JUST ONE OF THOSE THINGS / Lee Morgan / [THE COOKER]
(21) BUT BEAUTIFUL / Freddie Hubbard / [OPEN SESAME]
※私の大好きなピアニスト達の大好きなアルバムから
(22) WHO CAN I TURN TO / Pim Jacobs / [COME FLY WITH ME]
(23) DAT DERE / Bobby Timmons / [THIS HERE IS BOBBY TIMMONS]
(24) GREEN DOLPHIN STREET / Ahmad Jamal / [COUNT 'EM 88]

※最後はサックス奏者のアルバムからで(26)はフルートも演奏しています。
(25) COME RAIN OR COME SHINE / John Coltrane / [THE LAST TRANE]
(26) MY SHERIE AMOUR / Roland Kirk / [THREE FOR THE FESTIVAL]
(27) THE SHADOW OF YOUR SMILE / Oliver Nelson / [SOUND PIECES]

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

(7)

(8)

(9)

(10)

(11)

(12)

(13)

(14)

(15)

(16)

(17)

(18)

(19)

(20)

(21)

(22)

(23)

(24)

(25)

(26)

(27)

２００５年4月１５日（金）「映画館」 ア・ラ・カルト

１．Blue Train/John Coltrane(Blue Note)
２．Ole/John Coltrane(Atlantic)
３．"Philly" Joe Jones & Elvin Jones Together(Atlantic)
４．Doin' It Right Now/Von Freeman（Atlantic）
５．Komeda Jazz Vol.2(Muza)
６．Korossy Music Vol.1(Savannah)
７．At The Montreux Jazz Festival/Bill Evans(Verve)
８．Only Trust Your Heart/水橋　孝(RCA)
９．Madrigal/山中千尋(澤野工房)
10.Hank's Mood/岡崎好朗(East Works Entertainment)

雑誌「ＰＥＮ」４月１５日号に“見て楽しんで、聴いて驚く、ジャズのデザイン”という特集があり、永久保存版のようなジャケットやポスターなどの美しい羅列が掲載されていました。それを見ながら多いに盛り上がった例会でした。参加者は７名。また次週行なう特集の“さわり”も披露されました。

２００５年4月２３日（土）「ジャズカントリー」

特集　ジャパン＆旧共産圏ジャズ　石井宏一　＆　紅　我蘭堂

第１部　ジャパン・ジャズ　　担当：紅　我蘭堂

こんばんは。花のニッパチーズです。第１部は私の担当でジャパン・ジャズを特集いたします。会報ＧＲＯＯＶＹのＤＩＳＫ欄に掲載したアルバムを中心に、最近の録音からお聴きください。
（曲目の下にアンダーラインを付けている曲を掛ける予定です）

１．If You Could See Me Now/太田寛二(What's New Records WNCJ-2117)
太田寛二(ｐ)、EARL　MAY(ｂ)、JIMMY　LAVELACE(ds)、霧生ナブ子(vo)
Only 3
2001年8月23日ニューヨーク録音
1.If　You Could See Me Now 2.No Name Blues 3.Yesterdays 4.Choose Now 5.All The Things You Are 6.Tenperance 7.Out Of Nowhere

渋谷秀夫氏や五楼庵氏などの推薦ピアニスト。太田寛二は正統的？なビバップ、ハードバップ・ピアニストです。多分２枚目のアルバムですが、１枚目のLP「Blue High－Land」は中古店などで数万円で取り引きされているらしいです。本日のオープニングは甘美なバラード・プレイでいかがでしょうか。時間があれば乗り乗りでゴキゲンな６曲目のテンパランスも掛けさせていただきます。

２．Hank's Mood/岡崎好朗(EWE　EWCD-0079)
岡崎好朗(tp)，岡崎正典(ts)，三木成能(p)，上村　信(b)，吉岡大輔(ds)　2003年2月17，18日，3月25，26日録音
1.Dee's Beat 2.Bossanova#8 3.Hank's Mood 4.Portrait Of Jenny 5.One For M 6.All The Things 7.Nana's Dance 8.You Don't Know What Love Is 9.Will You Still Be Mine

このアルバムを聴いての率直な感想は、ここまで50、60年代のハードバップにこだわった創り方をして大丈夫なのかな？　ということでした。けっして悪いということではなく、ハードバップ好きの私は、むしろ大歓迎。それにスタイルは古典的とはいえ、彼らなりのフレーズや工夫も随所に表れていています。その辺が聴きどころでしょうか。本日はアルバム・タイトル曲と情感たっぷりに唄いあげるバラードの４をお聴きください。今後も注目したい岡崎兄弟です。

３．So　Many　Stars/斉藤真理子(What's New Records WNCJ-2142)
斉藤真理子(ｐ)、俵山昌之(ｂ)１・３・６・９、佐々木悌二(ｂ)２・４・５・７・８、広瀬潤次(ds)　2004年9月22日、26日録音
1. If I Were A Bell 2.Flower In The Heaven 3.The Sidewinder 4.Love＆Peach 5.So Many Stars 6.Three Legs 7.Identity 8.When You Wish Upon A Stars 9.Goodbye

このアルバムを聴いた印象は“進化と挑戦”ということです。斉藤真理子のピアノによる創造性はファースト・アルバムから進化しています。また挑戦ということは、「ほう、こんな“手”があったか」と唸ってしまった１や３の演奏で表されています。斉藤真理子の言葉では、このアルバムはライブ感覚で創ったとのこと。確かにライブとアルバムでは音創りを変えるプレイヤーが多いと思うが、新しいことに挑戦している気概を、ひしひしと感じます。時間があればバラード曲も掛けて、女性らしいエモーショナルな表現も、お聴きください。

４．For Lovers／土濃塚隆一郎(OMAGATOKI OMCZ－1017)

土濃塚隆一郎(flh)、板垣光弘(p、kyd, org)、吉木 稔(b, elb)、宇山満隆(ds, per)、外園ゆういち(ds、per) 2004年8月3,4, 5日録音

1.Beautiful Love 2.Grangpa 3.Scandal 4.Estate 5.Del Sasser 6.Change The World 7.Until Tomorrow 8.Solar 9.Lonely Soul 10.Without A Song 11.Autumn Leaves 12.Feel Like Makin' Love

“若い”というだけで、何をやっても許されることもあります。だがこのアルバムにおける土濃塚たちの演奏は、ストリート・ライブの経験を積み重ねてきているだけに、若さにまかせた暴走ではなく、きちんと聴かせどころをわきまえていて、立派なミュージックとなっています。それにしても音色が柔らかいフリューゲルホーンを駆使して吹き上げる、こんなに激しいビューティフル・ラブやオータムリーブスは滅多にないでしょう。

５．吉岡秀晃 トリオ at DOUG

吉岡秀晃(ｐ)、沼上 励(ｂ)、守 新治(ｄｓ) １９９４年3月２４日録音 長崎波佐見『Ｄｏｕｇ』

1. Billy Boy 2. My Funny Valentine～Time Stream 3. Dahoud 4. Cool Struttin' 5. That Sunday That Summer

長崎波佐見『Doug』のマスター立石氏のご好意でいただいたライブ録音。最高に盛り上がっている状況がダイレクトに伝わります。“ビリー･ボーイ”という曲はレッド・ガーランドがテーマ曲のようにしていた曲です。何といっても本名はウイリアム・ガーランドですから本当の愛称は“ビリー”だったのです。

吉岡秀晃は世界中の誰よりも最高に“ビリー・ボーイ”が似合う男です。レッド・ガーランドは本当に良い後継者を日本で得ました。ただ勘違いされると困るのですが、吉岡はガーランドだけではありません。ホレス・シルバーやウィントン・ケリー、はたまたボビー・ティモンズらのいいとこを見事に吸収して、自分のスタイルを創り上げています。

６．存在～New & Old Wonder/音川英二WITH森山威男

(発売：ハートミュージック 製造、販売EAST WORKS ENTERTIMENT KTST-7002)

音川英二(Sax)，森山威男(ds)，田中信正(p)，高瀬 浩(b)，佐藤芳明(Accordion)，森山由紀子(Percussion)※ Only 5 2003年3月24，25日録音

1.New & Old Wonder Trilogy Part。B/E PartII G On D ParIII New & Old Wonder 2.Wild River 3.Life As Is 4.Primal Force 5.Giants Steps 6.日本海の朝焼け

コルトレーンはお嫌いですか？ たまにはコルトレーンなどいかがでしょうか？ 冒頭から訳の分からない質問で申し訳ありませんが、３パートに分かれている１をお聴きください。日本におけるコルトレーン派の双璧(もうひとりは井上淑彦)である音川英二の“音楽表現”にかける意気込みは、感動的だと思いました。またドラムスの第1人者である森山威男の、時に音川を鼓舞し、時に真っ向から挑みかかるようなドラムスも聴いてください。両者のスリリングな掛け合いはジャズが持つ“心地良い緊張感”を創造しています。このふたりに挟まれているようですがKJFCゆかりの田中信正のピアノもいいです。またジャズには珍しいといえるアコーディオンも、隠し味のように効いています。ほのぼのとした哀愁ただようこの音色があるから、テナーやドラムスも一段と映えるのでしょう。

７．中山英二 ＆ 山口友生 Live Concert at EIGAKAN

中山英二（ｂ)、山口友生（ｇ） 2004年11月23日

1. O Grand Amor 2.Cool Struttin' 3.Greensleeves 4.Emi 5.In The Morning Mist 6.Jenie 7.Song Of The Bird

もう1枚ライブ盤です。昨年11月に行なわれた第1回の「映画館」ライブからですが、客席のキャパシティーがなくて、多くのＫＪＦＣ会員に聴いてもらうことができませんでした。当日の模様は会報ＶＯＬ.３５に渋谷さんと私が書いた通りですが、実際の音をお聴きください。中山さんが、是非ＣＤ化して発売したいというくらい完璧な演奏で素晴らしいライブでした。すべての曲を紹介したいのですが、時間の都合もあるので本日は「Jenie」をお聴きいただきます。

８．Misty Night／安保 徹(What'ｓ New Records WNCJ－2132)

安保 徹(ts)、太田寛二(p)、佐々木悌二(b)、村田憲一郎(ds) 2003年12月13，14日録音

1.Basic Birks 2.Body & Soul 3.Little Willie Leaps 4.On A Misty Night 5.Picture Heath 6.You've Changed 7.Red Top 8.Body & Soul

このアルバムを聴いた時に、ズート・シムスの名盤「イン・パリ」(デュクレテ・トムソン)を想起しました。安保 徹の音色やフレーズが名手ズートのそれにオーバーラップしてしまったのです。それほどここでの安保 徹はゆとりがあり、ミュージックそのものをしみながらも楽しんでいるように聴こえます。私はやっぱり、こういうジャズが一番好きです。心の底から男性的なテナー・サックスの醍醐味を充分に味わっていただける名盤です。

第２部 「旧共産圏のジャズ」　担当：石井宏一

□演奏者略解

DUSKO GOJKOVIC(tp)
1931.10.14：旧ユーゴスラビア、ベオグラード音楽院で48-53年まで学ぶ、55年ドイツに亡命、バークリー音楽院に留学（渡辺貞夫の同期）の後、ドイツに戻りヨーロッパ各地で活躍。96年に初来日後、しばしば日本で公演を行う。

TOMASZ STANKO(tp)
1942.7.11－ポーランド：1962年にオーネット・コールマンの演奏に触発されて、ポーランドでは最初と言われるフリージャズグループ「Jazz Darings」を結成。ドイツECMの主要アーティスト。

YANCY KOROSSY(p)
1926.3.26－ルーマニア：69年にドイツに亡命、70年渡米。西側世界では、「IDENTIFICATION」が知られる程度だが、日本には知る人が多くいる。60年代初頭の『ヤンシー・キョロシー/イン・ポーランド』（MUZA→NORMA2003年9月発売）や89年リリースの<MELODIES DE PARIS>（HUNGAROTON）の輸入盤がいずれもCDで日本でも手に入る。

ALADAR PEGE(b)
1939－ハンガリー：バルトーク音楽院、リスト音楽院を卒業。リスト音楽院の教授で、地元ではクラシックの教育者、演奏家としても知られている。チャールズ・ミンガスのベースを相続したことでも知られる。

AKI TAKASE(p)　高瀬アキ
1948年、大阪市生まれ。夫君のアレキサンダー・フォン・シュリッペンバッハとの双頭バンドで、ヨーロッパのスタープレイヤーを集めたベルリン・コンテンポラリー・ジャズ・オーケストラを結成、ヨーロッパ各地で演奏活動を続けている。

KRZYSZTOF KOMEDA(p)
1931．4．27－69．4．23：本名はKRZYSZTOF TRZCINSKI、本業は医師。ポーランドジャズの神話的存在で、ロマン・ポランスキーの映画音楽などでも有名。ロサンゼルスで交通事故に遭い、数ヶ月間意識不明のままワルシャワにて死去。

PAQUITO D'RIVERA(as,cl,etc)
1948．6．4－キューバ、ハバナの生まれ。父のTITOはクラシックのサックス奏者。6歳で最初に人前での演奏を行い、10歳のとき、ウェーバーのクラリネット協奏曲をハバナの劇場で演奏している。78-80までスペインに滞在、80年代初頭にアメリカ亡命。

演奏曲目と奏者

No	曲名	アルバムタイトル	録音		演奏者
1	BELGRADE BLUES	BELGRADE BLUES	1966.5.19	LPV4201	DUSKO GOJKOVIC(tp,flh) SAL NISTICO(ts) CARL FONTANA(tb) NAT PIECE(p) MIKE MOORE(b) RONNIE ZITTO(ds)
2	AFTER A LONGTIME	AFTER A LONG TIME (EGO)	1980.5		DUSKO GOJKOVIC(tp) JOE HEIDER(p) ROMAN SCHWALLER(ts) ESLA ECKINGER(b) ALVIN QUEEN(ds)
3	OLD FISHERMAN'S DAUGHTER	AFTER HOURS (ENJA)	1971.11		DUSKO GOJKOVIC(tp) TETE MONTOLIU(p) JOE NAY(ds) ROBERT LANGEIS(b)
4	PURPLE SUN	PURPLE SUN(CD) (MILO RECORD)	1973.4.9		TOMASZ STANKO(tp) ZBIGNIEW SEIFERT(vln,as) JANUSZ MUNIAK(ss,ts,fl,perc) HANS HARTMANN(b) JANUSZ STEFANSKI(ds,perc)

No	曲名	アルバムタイトル	録音		演奏者
5	I CAN'T GIVE YOU ANYTHING BUT LOVE	IDENTIFICATION （ＣＤ）(MPS)	1969.9.9	POCJ2630	YANCY KÖRÖSSY(p)
					J.A.RETTENBACHER(b)
					CHARLY ANTOLINI(ds)
6	FEHER HOLLO (THE WHITE RAVEN)	MODERN JAZZ IV ANTHOLOGY 67 (OARITON)	1966	LPX 17372	ALADAR PEGE(b)
					JENO BALOGH(p)
					KAROLY FRIEDRICH(tb)
					ISTVAN UNGAR(acord)
					GYULA KOVAC(perc)
7	FALLING LEAVES	MOTREX INVENTIONS (HUNGAROTON)	1970	LPX 17418	ALADAR PEGE(b)
					B_LA LAKATOS(p,org)
					GEZA LAKATOS(ds)
					MIHALY RADULY(ts,f)
					JANOS NEMETH(ts)
8	RONA BLUES	同上			同上
9	遠州燕返し	ＪＡＺＺＰＥＲＡＮＴＯ (SUPRAPHON)	1987．4．6－10	110067-1511H	JANA KOBKOVA(vo)
					AKI TAKASE(p)
					ALAN VITOS(ds)
10	TYPISH JAZZ	KOMEDA JAZZ Vol.1	1961.10.29		BERNT ROSENGREN(ts)
					KRZYSZTOF KOMEDA(p)
					ADAM SKORUPKA(b)
					LECH DUZIAK(ds)
11	MY LITTLE ANNA	PAQUITO D'RIVERA (CUBAN NAYIONAL RECORD)	1976.12.9	CULP-6	PAQUITO D'RIVERA(as,ss,f)
					ESKO LINNAVALLI(p.ep)
					NIELS-HENNING ORSTED-PEDERSEN(b)
					ESKO ROSNELL(ds)
					OSCAR VALDÉS(per)
12	LA CANCIÓN DE LOS NINÓS	同上	同上		同上

東京１、音のいい店を目指している

ジャズスポット『映画館』

東京都文京区白山５－３３－１９　TEL．０３－３８１１－８９３２

営業時間：ＰＭ１４：００～２３：３０

休み：日曜日、祝日

交通：都営三田線「白山」駅Ａ３出口から坂の上に向かって、徒歩２０メートル

または営団南北線「本駒込」駅より徒歩３分

メニュー：コーヒー　500円　ビール　600円　スパゲティー　650円など

ウィスキー(ボトル)　6,000円より

２００５年５月２０日（金）「映画館」特集：N.H.O ペデルセンを偲んで

1．バウンシング・ウィズ・バド／バド・パウエル
2．カーク・イン・コペンハーゲン／ローランド・カーク
3．カンバスエーション／サヒブ・シハブ
4．ワン・フライト・アップ／デクスター・ゴードン
5．マイ・ネーム・イズ・アルバート・アイラー
6．ダーク・ビューティ／ケニー・ドリュー
7．スパニッシュ・ナイト／フィリップ・カテリーン&ペデルセン
8．ア・ディ・イン・コペンハーゲン／デクスター・ゴードン
9．ニューヨーク・シーン／ジョージ・ウォーリントン
10. マイルス・ディビス（COLOMBIA盤）

以上先日亡くなったニールス・ヘニング・オルステッド・ペデルセンの追悼コンサートを「映画館」の吉田マスターの全面的な好意とバックアップで行ないました。それにしても弱冠16歳でバド・パウエルと共演したり、ローランド・カークやアイラーと共演したりと50年以上にわたって大活躍したベースマンだったことが、よくわかりました。

※本日は8名プラス猫1匹（映画館の名物猫）の参加でした。

今後の予定

ジャズスポット「映画館」　　電話０３－３８１１－８９３２

２００５年７月１５日（金）午後７時～午後１０時
２００５年８月１９日（金）午後７時～午後１０時
２００５年９月１６日（金）午後７時～午後１０時

「JAZZ COUNTRY」　　電話０３－３５７２－７６８４

２００５年７月２３日（土）午後７時～午後１０時
　特集：菅野邦彦　　担当：H．S．
２００５年８月２７日(土) 午後７時～午後１０時
　レコード持ち寄り
２００５年９月２４日（土）午後７時～午後１０時
　特集：未定　　特集は変更になる場合があります。

編集後記

・GROOVY36号はいかがでしたでしょうか？　会員相互のコミュニケーションをより深められるような企画を考えてみました。ご意見ご要望をどんどんお願いいたします。・先日、日本のジャズ喫茶の草分けである横浜のある「ちぐさ」に行ってきました。70年以上の歴史を持つお店だけに店内の空気も違った気がしました。20人も入ればいっぱいの空間ですが、半世紀以上も鳴り続けているであろう巨大なスピーカーからは、とても心地良い柔らかい音色が店内を満たしていました。《ジャズ喫茶》は日本独特の形態です。お客さんが減って経営が苦しいと聞きますが、何とかお店を継続してもらいたいものです。GROOVYでは可能な限り応援していきたいと思います。（紅）

ＫＪＦＣ会員募集中　　一緒にジャズを楽しみませんか？

ＫＪＦＣは心からジャズを楽しむ人の集まりです。オタクはいません。むしろみんなで好きなジャズを勉強して、分かち合っています。みんなジャズについての素人です。一度例会に遊びにきてください。あなたの好きなジャズが、必ず見つかるでしょう。

《KJFC の主な活動》

・毎月２回のレコード・コンサートを主体にした例会
・年１,２回自主ライブの主催
・会報 GROOVY の発行
・ホームページの運営などです。

詳しくはホームページのメールか、下記まで　０９０－４１７８－１８３３（布田幸雄）